基山町文化財調査報告書 第２集

特別史跡 基肄城跡

林道建設計画に伴う確認発掘調査報告書

１９７７

基山町教育委員会

基山町文化財調査報告書 第2集

特別史跡 基肄城跡

林道建設計画に伴う確認発掘調査報告書

1977

基山町教育委員会

は　じ　め　に

基肄城跡は天智４年，大宰府防備の目的で大野城跡と共に築かれた我国最古の朝鮮式山城であり，基山町が誇る文化財として学術的に極めて重要な史蹟であります。現在なお，土塁，水門，礎石群等は当時のおもかげをよくとどめ，昭和29年には国指定の特別史跡となって今日まで全域にわたる保存がはかられてきました。

林道建設計画が町事業として具体的方向に進んだのは昭和49年，戦後に植林された樹木が伐採期にあたってこれに要する林道が不備な状態にあるとの地元の切実な要望によるものであります。このため町では同年，文化庁に対して現状変更の許可申請書を提出，その回答として，本件が発掘調査の結果をまって処理されるべき問題であるとの通知を受けました。

今回の調査はこの通知に基づく確認のための発掘調査として，昭和51年度文化財保存事業費補助金の交付を受けて実施されたものであります。基肄城の性格については，これまで十分な発掘調査が行なわれていないため，その詳細はよく知られていません。今回の調査はその意味で，今後の研究の契機になるものと思われます。

また一方，文化財の重要性が一般にもよく認識されつつある今日，これを保存し，社会教育上の場として活用してゆくことは我々の責務でもあります。町では昭和52年度から基肄城跡保存整備計画の策定を進めることになっていますが，今回計画にあがった林道の場合も，文化財の保存が十分に計られることを前程としたうえで，全体的な調整が計られなければなりません。

最後に，この調査にあたられた調査委員，調査員並びに作業員の方々に深甚の謝意を表しますと同時に，今後とも文化財保護に対するなお一層の御協力を賜わりますようお願い申し上げます。

昭和52年３月31日

基山町教育委員会

教育長　中　村　喜　一

例　　言

1．本調査は基肄城跡内における林道建設計画に伴う事前の発掘確認調査である。

2．本調査は基山町教育委員会が主体となり，昭和51年度文化財保存事業費補助金の交付を受けて実施した。

3．発掘調査委員会の構成は次のとおり。

委員長	中村喜一	（基山町教育委員会教育長）
委　員	鏡山　猛	（九州歴史資料館館長）
	高島忠平	（佐賀県教育委員会文化課　調査係長）
	田平徳栄	（同　文化財保護主事）
	安本雪男	（基山町文化財調査委員）
	長　忠生	（　同　　）
	木原武雄	（　同　　）
	松隈　嵩	（　同　　）
	木原定視	（基山町教育委員事務局主事）
	平田通男	（同　社会教育主事）

4．発掘調査にあたった者は次のとおり。

高島忠平	（県文化課調査係長）
樋渡敏暲	（　同　指導主事）
田平徳栄	（　同　文化財保護主事）
天本洋一	（　同　同　）
東中川忠美	（　同　同　）
真玉秀樹	（九州大学考古学研究室研究生）
新開淑子	（筑波大学歴史人類学科学生）

5．調査後の遺物整理は田平徳栄，真玉秀樹，亀田修一（九州大学考古学研究室修士課程）が行なった。

6．本書の作成は本文Ⅳ－３～５を亀田修一，他を田平徳栄が担当，図面の整理にも２名があたった。写真は主に田平徳栄，拓本は藤原新子が担当した。

7．本書掲載の軒先瓦は一部を木原武雄氏所蔵品から拝借し，御協力いただいた。また丸林所住の天本敬一氏にも，遺物の借用等で多大な御援助を願った。

8．資料について，九州芸術工科大学　沢村仁教授，九州歴史資料館　森田勉氏から貴重な御教示を賜わった。

目　　次

Ⅰ　調査経過 …… 2
Ⅱ　調査の概要 …… 2
Ⅲ　遺構について …… 4
Ⅳ　遺物について …… 6
1．土師器 …… 6
2．須恵器 …… 10
3．瓦 …… 13
(1) 軒先瓦 …… 13
(2) 道具瓦 …… 14
(3) 平瓦・丸瓦 …… 18
(4) 叩文様 …… 21
4．その他 …… 22
5．〈付〉須恵質瓦からみた九州の初期瓦製作 …… 23
Ⅴ　結語 …… 26

挿　　図

Fig. 1　発掘調査地点位置図 …… 1
Fig. 2　礎石建物付近地形実測図（第9地点） …… 5
Fig. 3　礎石建物実測図 …… 7
Fig. 4　土師器実測図 …… 9
Fig. 5　須恵器実測図 …… 11
Fig. 6　軒先瓦実測図・拓影 …… 15
Fig. 7　道具瓦（斗瓦）実測図・拓影 …… 16
Fig. 8　道具瓦（隅切瓦・面戸瓦）実測図・拓影 …… 17
Fig. 9　平瓦・丸瓦実測図・拓影 …… 19
Fig. 10　叩文様拓影 …… 20
Fig. 11　土管状土製品実測図 …… 22

図　　版

PL. 1　Ⅰ　基肄城跡航空写真……30
　　Ⅱ　基肄城跡遠望……30
PL. 2　Ⅰ　山頂土墨線……31
　　Ⅱ　第1～第6地点……31
PL. 3　Ⅰ　礎石建物……32
　　Ⅱ　礎石建物の土止石列……32
PL. 4　Ⅰ　第3地点トレンチ……33
　　Ⅱ　第10地点トレンチ……33
PL. 5　Ⅰ　第12地点……34
　　Ⅱ　第11地点……34
PL. 6　Ⅰ　土　師　器……35
　　Ⅱ　須　恵　器……35
PL. 7　　軒　先　瓦……36
PL. 8　Ⅰ　隅　切　瓦……37
　　Ⅱ　面　戸　瓦……37
　　Ⅲ　熨　斗　瓦……37
PL. 9　Ⅰ　平　　瓦……38
　　Ⅱ　行基葺丸瓦……38
PL. 10　Ⅰ　玉縁付丸瓦……39
　　Ⅱ　土管状土製品……39
　　Ⅲ　墨書およびヘラ描き文字……39
PL. 11　　叩　文　様……40
PL. 12　　昭和初めの頃の基肄城跡……28

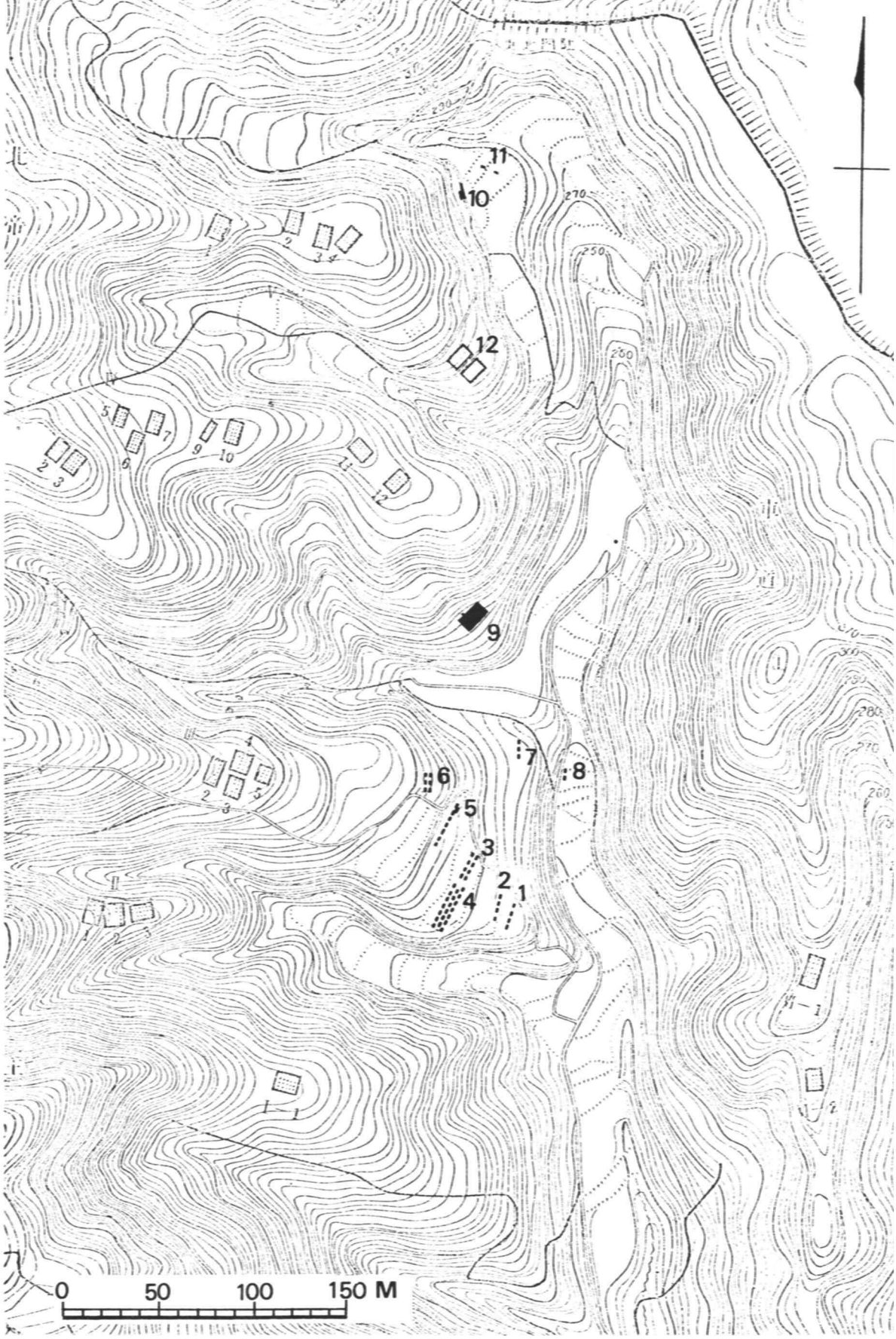


Fig . 1　発掘調査地点位置図（数字は地点番号）『大宰府都城の研究』より

Ⅰ　調　査　経　過

7月12日調査開始。水門から始まり，基山と坊住山の2峰に狭まれた谷の西側を通る計画路線に沿ってトレンチを設定した。設定箇所は路線にかかる平旦な地点，ないしは遺構が存した場合その影響を被る恐れのある地点を選んだ。全12地点（Ｆｉｇ.1)，最初第1～8地点までは階段状に平旦部が続くことから，遺構の確認を目的としたトレンチ発掘。各トレンチは，一帯が杉松の植林が密なため十分な間隔がとれず，1m巾を長く伸ばして2mおきに，遺物の出土がなくなる地山まで掘下げた。ある程度の広さがある場合はこれを1m離して数本並行させた。7月31日までに，この付近についての調査およそ終了。

8月2日より，さらに上方の第10～12地点に移動。まず密生した雑木の伐採から始める。第10，第11地点付近は東北門跡にも近く，付近に礎石らしき石材が数個露出し，また今回の要調査地点中，最も広い平旦地をなすことから遺構の残存が十分予想されていた地点である。いずれも先と同様トレンチ発掘に依った。第12地点は今回の計画路線から約 100m離れ，しかも15m程高く位置するが，路線の影響を考慮して要調査地点に選んだ。礎石は既に一部が露出して並んでおり，地形からみても礎石建物と首肯される。なお第12地点東方下にも第10地点に続く平旦地がある。しかし20年生程の杉植林が密なため調査は断念した。礎石等の石材は見当たらない。

8月17日より最後の第9地点に入る。ここでも既に礎石列が地形肩部に一列露出しており踏査の時点でそれと知られていた。計画路線中心杭はこれより約6mしか離れておらず，保存のためにその実態を知る必要が生じたので，全面発掘して残存状況と性格の確認に努めた。9月4日終了。

以降9月6日，7日トレンチの埋戻し，10日まで残務整理，器材撤収等を行ない，当日発掘調査は一応完了した。

なお期間中，8月28日と9月6日の2度にわたり調査委員会を開催し，現地視察に基づき今回の発掘の結果，処置等について討議を行なった。

Ⅱ　調査の概要

結果的に今回遺構として確認し得たのは第9地点と第12地点の礎石建物のみで，他は確証なし，もしくは遺構が認められなかった。しかし遺物については，殆ど破片であるが出土地点の確かな瓦，土器類が，発掘面積の少なさに比べては多く出土したので，基肄城の性格を押えるうえでは貴重な資料を得たといえる。今後，大野城などとの比較研究を進めるための参考となろう。以下，まず各地点ごとにその概要を述べる。

第　1　地　点

第3地点まで続く階段状平旦部の最下段にあって谷を見下ろす。面積は少なく，トレンチ

は1本のみ入れた。旧水田跡にあたり約 0.8mまで耕作が及んでいる。遺構は認められなかった。遺物は瓦，土器類の他に鉄鏃。

第 2 地 点

平旦部としてもごく狭く，トレンチは1本のみ。旧水田跡で，約 0.8mまで耕作。遺構は認められない。しかし遺物は他に比して土器類が多く，器形の知られるものも少なからず含まれている。他に瓦数点，石斧1点，鉄鏃数点。

第 3 地 点

第4地点と続くが約 0.2m高い。当尾根にあっては共に最も広い平旦部をなしており，遺構の残存も十分予想されたのでトレンチは2本並行させた。しかし旧水田跡にあたり耕作は約1mまで及び，付近に遺構の存在も考えられるが確認されなかった。遺物は比較的多く，瓦と土器類が点数で半々出土する。特に1箇所で部分的な焼土面が検出され，土器の一括出土をみた。

第 4 地 点

第3地点と殆ど同様な状況。トレンチは4本並行させたが，やはり遺構は確認されなかった。遺物は瓦と土器類が数点と少ない。

第 5 地 点

旧水田跡にあたり，整地の際の攪乱が特に著るしく，約 1.6mの深さまで遺物を出土する。トレンチは1本。礎石に使用可能な石材1箇が埋込まれているが，遺構は確認されなかった。遺物は比較的多く，瓦と土器類が半々出土する。

第 6 地 点

見はらしのよい狭い平旦部で，雑木が密生する。トレンチ2本並行させたが浅くて地山に至り，遺構は認められなかった。遺物はごく少なく瓦が数点。

第 7 地 点

谷からあまり比高差のない旧水田跡。耕作土は浅いが，遺構は認められなかった。遺物は土器片が数点。

第 8 地 点

伐採前に平旦な高まりと見られたが，谷水による礫の堆積にすぎなかった。

第 9 地 点

礎石建物1棟が所在する。地形的には谷との比高差約20m，僅かに谷に向って突出した尾根端の場狭な自然平旦部を利用しており，これまで知られた礎石建物中では最も標高が少なく，しかも特異な占地を示している。既に礎石は崖肩部の1列が露出していたが，今回はこれを全面発掘した。遺物は瓦が極めて多量で，そのうちに軒丸瓦，軒平瓦も各1点含まれている。土器類は数点で少ない。発掘後の処置は埋戻さず，礎石を露出させた状態のままにおいた。詳細は次項に述べる。

第 10 地 点

現在山道が通る平旦部で，トレンチ2本並行させた。地山まで約 0.4mと浅い。礎石に使

用可能な石材1ケ認められ，付近に遺構の存在が十分予想されるが，確認はされなかった。遺物は第9地点に次いで多く，殆どが瓦，他に数点の土器類がある。瓦のうちには軒丸瓦片1点が含まれる。

第 11 地 点

谷頭に突出した広い平旦部で，外観しただけでも礎石建物の立地として申し分ない。旧水田跡にあたるが，現在では雑木が密生しており，分け入ることさえ容易でなく，そのため今回は日数の都合でその北側一部を伐栽し，主に土層状況を観察するにとどめた。トレンチ内でみると，水田整地の際，山腹に続くその西側が相当削られているらしく，約 0.4mで地山に至る。遺構は確認されなかった。遺物は土器類が数点ある。付近には礎石に使用されたと思われる石材は幾つか散在するが，原位置を保つものはない。何らかの遺構が在した可能性は極めて高いが，そうとしても大部分は整地の際に破壊されたと予想される。

第 12 地 点

既に礎石列が一部露出しており，また計画路線からはかなり離れるので今回は確認のための伐採にとどめた。礎石建物は2棟が上段下段に並んでおり，下段のそれは鏡山『大宰府都城の研究』に触れられているものに該当するかと思われる。共に詳細は不明である。

以上要約すれば，第1・第2・第8地点では遺構なし。第3～第6地点及び第10・第11地点では付近に遺構の存在が予想されるがその確証なく，仮に存在したとしても遺存度は極めて悪いと考えられる。そして第9・第12地点で礎石建物の存在を確認，という結果になる。

なお，計画路線は第11地点から左折して約100m先に終点を置くが，それよりさらに約100m進むと数棟の建物礎石が谷を雛段状に占めて群在している。これまで実態が明らかでなかったが，杉が高く成長した現在ではその踏査は比較的容易である。この地点は一群の建物礎石として，今後特に注意する必要があろう。

Ⅲ 遺構について

遺構が確認され，全面発掘調査を行なった第9地点の礎石建物についてのみ説明する。これは発掘前に崖肩部の礎石1列が既に露出していたもので，植林以前に写された『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告・下』P.6の写真中のものがこれではないかと思われる(PL.12)。残りの部分を発掘した結果，桁行最東南辺がその北東隅で根石のみ残し，また隣石が半分持ち去られているものの，残存は総じて良好であることが知られた。（Fig. 2・3）

立地的には前述したとおり尾根端の僅かな平坦部を選んでいるが，作業上ある程度の整地を行なっていることは明らかで，崖端部は押し拡げられた土によって傾斜が変わっている。また土止石であろうか，計11個の大小不揃いの石材が不規則に崖肩部に並び，一端は地形に沿って西方向に曲がっている。礎石建物は桁行5間×梁行3間で，実側図の桁行方位角N25°58′25″E。柱間は桁行と梁行とが明らかに異なる。今，仮に規準尺を1尺＝29.7cmに想定した場合，梁行は1間が 237.6cmすなわち8尺，同じようにして桁行は 216.8すなわち 7.3

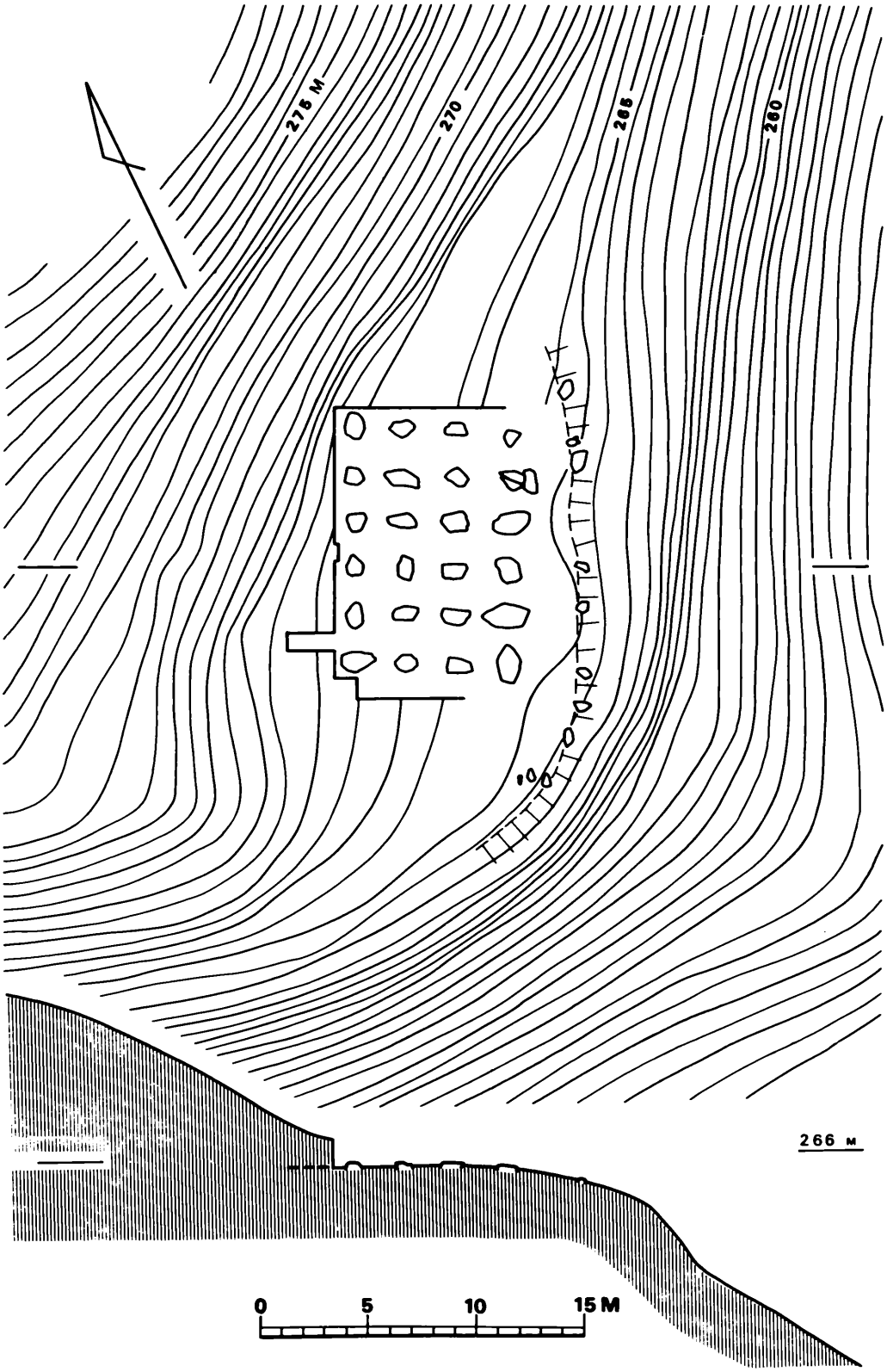


Fig . 2　礎石建物付近地形実測図（第９地点）

尺をあてるのが妥当であると思われる。統一的な規準値は得られなかったが，ここでは8尺と 7.3尺の2種の柱間が併用されたと考えておく。各礎石は付近に産出する花崗岩で，自然のまま，あるいは上部を粗く平旦に調整を施して使用している。そのうち桁行最東北辺の1列はいずれも特に規模が大きく，中には長さ2mを越えるものもあり，礎石としては異例に属す。各配置はその長軸を等高線に直交させて置く傾向がつよい。高さはほぼ一定しており上面で標高約 266m。礎石規模の違いはこの点で，原地形にあわせた礎石配置上の高低調整の意味が主であったと考えられる。また，先の2石以外でもいずれも根石を置いているものと思われるが，将来，より十分な調査を期す意味からそこまでは掘下げなかった。

その他，雨落溝等の存否確認のため，尾根上方に向って1箇所トレンチを入れてみた。梁行最西南辺から約 3.0mまで伸ばしてなお埋土が厚く，元斜面には至らなかった。はずれ際でかすかすかに落込み始めるように思われたが，礫敷等は一切検出されなかった。

出土遺物は瓦が多量で，他に数点の土器類がある。殆どは現検出面から約 0.2m以上浮いた状態での出土であるが，上方の礎石建物が相当離れていることからみて，一応本遺構に伴うものと見做してよかろう。瓦では単弁八葉軒丸瓦1点と三重弧文軒平瓦1点が，今回はじめて北隅付近の同一地点から共伴した。また建物構造に関しては，後述する隅切瓦の出土が問題になる。切妻以外の屋根構造も，資料の増加をまって今後吟味する必要があろう。

築造年代は，やはり後述する須恵器の形式からみて7世紀後半，おそらく基肄城創建当初ないしはそれをさほど下らない時期と推定される。

Ⅳ　遺物について

1．土　師　器（Fig.4）

器種別には甕・甑・高坏・坏・皿の5種があるが，全体として量はさほど多くなく，しかも破片が大部分である。割合では坏が最も多い。以下，器形の知られるものを基準に述べてゆく。

1は底部が丸底に近い甕。口縁部は大きく外反し，肩部がなだらかに落ちて，胴部最大径を中位におく。調整は口縁部ヨコナデ，胴部は外面タテハケのあと下位½弱から底部にかけてヨコナデ。内面はすべてヘラで削る。淡褐色を呈して僅かに砂粒を含み，外面にススの付着をみる。第3地点焼土面から出土した。同形式の口縁部はやはり同一地点でもう1点ある（以下点数は別個体分）。

その他これに類するが，口縁部外反の少ない破片が2点，第3・第4地点で出土している器壁は厚く，砂粒を多く含んで淡黄色。口縁部はナデ，胴部肩にタテハケを施す。

2は口縁部が内側に稜をなして水平近くまで外反する小形の甕。口縁部から胴部外面にかけてはナデ，内面はヘラケズリを施す。砂粒を多く含み，淡黄褐色を呈す。また外面にススが付着している。第3地点出土。

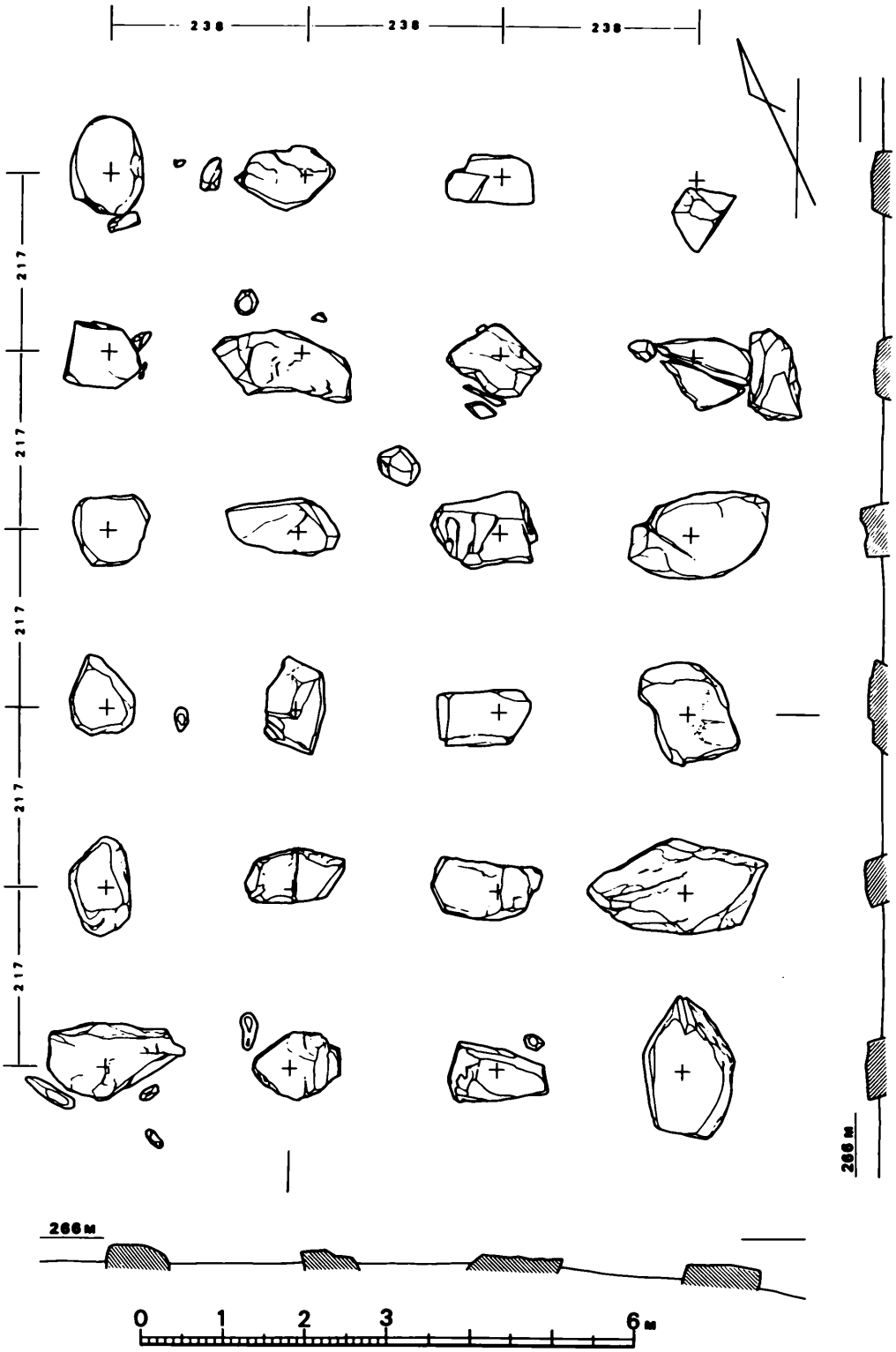


Fig . 3　礎石建物実測図

この種の小形甕は全部で5点，第1地点および第2地点からも出土している。

3はかすかな稜をもって体部がゆるやかに立上る坏。ヘラケズリは外底部から外体部下位$\frac{1}{3}$に及び，それ以外はナデて仕上げる。淡赤褐色を呈し，砂粒が多い。第3地点出土の3点のうちの1つである。

4は底部と明確な稜をなして体部が立上る坏。外底部から外体部下位$\frac{1}{3}$までヘラケズリ，他をナデて仕上げる。淡黄褐色でわずかに砂粒を含む。第3地点出土。

他に同形式ながら一まわり小形のものが6点，第1・第3・第5地点で出土している。いずれも底部ヘラ切り，内外面ナデ調整と思われる。そのうちの1点(PL.10－Ⅲ)に全体の一部かもしれないが「寸」なる墨書が認められた。

5は体部が直線的に伸びて外に開く薄手の坏。底部から外体部下位$\frac{1}{3}$はヘラケズリのあとナデ，他もナデて仕上げている。わずかに砂粒を含み，赤褐色を呈す。第5地点出土1点のみ。

6は皿。体部は短かく直線的に，外に開いて伸びる。外底部はヘラケズリ，内底部および体部両面には主に横方向のヘラミガキを施す。砂粒は殆ど含まず，赤褐色を呈す。第3地点出土。

皿は全部で8点，他にも第1・第5地点で出土している。器形でみれば体部が直線的に伸びるものと外反するものとの2種に分けることもできる。

7は高台付きの坏。体部は多少内向気味に急に立上がる。外底部はヘラ切り。高台はやや外に開き，接合部を指でナデてかるい稜をつくる。内底部および体部両面はナデて仕上げられる。淡赤褐色を呈し，砂粒を含む。第3地点の出土1点のみ。

8は7に類するが，台は低く，体部と殆ど一直線をなす。外底部はヘラ切り，外体部は下位をヘラケズリしたのち，高台接合部にヘラで稜をつくる。内面はナデ。淡赤褐色を呈し，砂粒を含む。第3地点出土。

同形式のものは全部で3点，他に第1地点からも出土している。

9は高坏。坏部はかすかな稜をなしてやや内向しながら外に開いて立上る。脚はゆるやかに裾が拡がり，端部でやや上にはねる。整形は丁寧であり，坏部外底がヘラケズリ，それ以外は十分ナデて仕上げている。明赤褐色を呈し，胎土精良，焼成も良い。第5地点出土。高坏脚部破片と思われるものは他にもう1点あるが，器形はこれと明らかに異なる。

10は甑。途中を欠くが高さ28.5cmほどになろう。口縁部はやや直線的に外反，胴部は垂直に落ちたあと$\frac{1}{2}$から下位ですぼまる。底部はヘラ切りによって推定径14cmの孔をつくる。外面はタテバケののち，下部をナデ，内面はヘラケズリを行なう。暗褐色で砂粒を含み，外面にススを付着する。出土地点は第5地点。

甑は他に第3地点からも出土しており，全部で4点ある。そのうちの2点は10の形式とはいくぶん異なり，口縁部の開きがごく少ない。

以上，器形の知られる土師器は第1～第5地点に集中しており，地点別には第3地点が圧到的に多い。

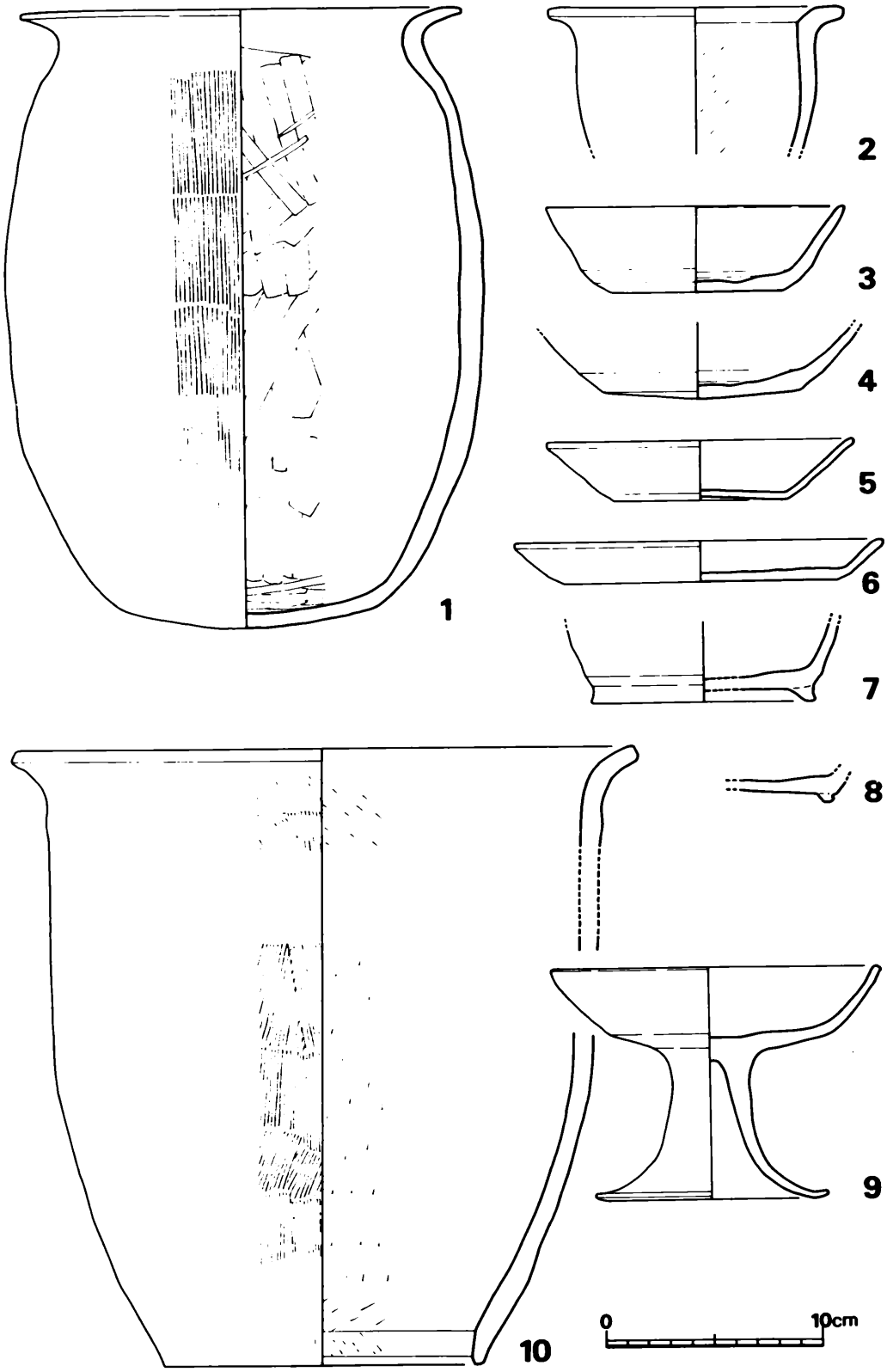


Fig . 4　土師器実測図

年代については主として太宰府跡出土品との比較から，坏**3**・**4**が7世紀後半，坏**5**～**8**が8世紀後半～9世紀初め頃と推定される。

点数が少なく，また多くは損乱層中の出土品なので，地点ごとの対応はここでは敢えてしない。

2．須　恵　器（Fig.5）

坏蓋・坏身・甕・高坏の4種が出土したが，殆どが坏類である。

1は返りをもつ坏蓋で，外面全体にヘラケズリを施してはいるがかなり厚手のもの。そしてなだらかなカーブがそのまま端部まで続く特徴を示す。内面は回転を止めてナデる。焼成があまいため軟質で，茶灰色を呈す。第9地点，すなわち礎石建物の地点出土である。

同形式のものはもう1点が同一地点で出土している。ただしこの方ははるかに小形で，十分なヘラケズリを施しており，器壁は薄い。

2も返りをもつ坏蓋。体部は上面で一度平旦をなし，やや折れて端部をつくる。外体部上面がヘラケズリ，端部および内体部をナデて仕上げている。焼成は良好で灰色を呈す。第9地点出土。

同形式のものは全部で11点あり，第9地点6点の他に，第1・第2・第5地点でもあわせて5点出土している。その中には灰色で堅緻なものと別に，焼成不良等の軟質品が4点ある。

3の坏蓋は擬宝珠が小さくつぶれ，低くなだらかな体部と，巾狭な平旦をつくって内体部有段の断面三角形端部をもつ。内外両面はナデて仕上げられている。色調は明灰色で焼成は良好。外面部上面に鋭い筆致で墨書があり，明らかに「山寺」と読める（PL.10－Ⅲ）。第4地点出土。

同形式のものは全部で8点，うち1点を除いて焼成は堅緻，調整はナデが多用され，ヘラケズリを残すものは少ない。出土地点は第4地点の他に第1・第2地点となっている。

4は坏身。底部に丸味をもち，口唇部は僅かに外反する。外底部から外体部下位$\frac{1}{3}$にかけてヘラケズリ，他をナデて仕上げる。赤褐色で焼成はあまりよくない。砂粒を含む。第5地点出土。

おおまかに同形式といえるものは全部で8点，第5地点以外では第4・第5・第9・第11地点でも出土している。外底部はヘラケズリのあとナデたものが2点。また軟質品2点が含まれる。

5は**4**に類するが，体部はかるい稜をなし直線的に伸びる。外底部はヘラケズリのあとナデ，他もナデて仕上げる。焼成は不良で軟質，淡青灰色を呈す。第5地点出土。

もう1点同形式のものが同地点で出土している。

6は明確な稜をつくって，やや内向しつつ体部が外に開く坏。外底部はヘラケズリ，内底部および体部内外をナデている。胎土・整形は須恵器そのものであるが，色調はむしろ土師器に近く，明かるい赤褐色を呈す。第3地点出土。

これに類するものは多く，全部で13点を数える。出土地点は6以外すべて第2地点から出

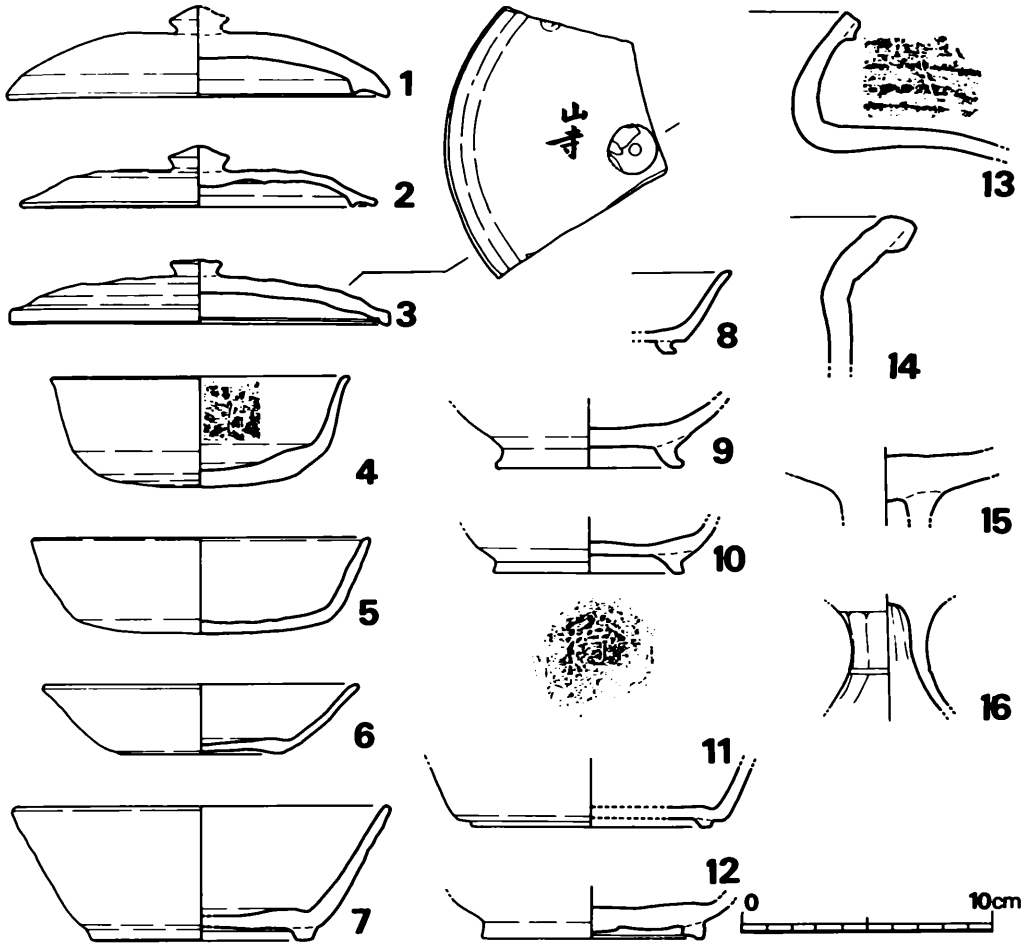


Fig . 5　須恵器実測図

土した。その中には体部の立上りのやや急なものが2点あり，6と分けて考えることも可能である。総じて調整は，外底部の場合ヘラケズリを残すものが少なく，ヘラ切りのあとナデまたは切り離したままのものが多い。また焼成は約半数が不良のため軟質である。

7は高台から直線的に伸びる体部を有する坏。外底部は切り離しのまま，高台接合部は指でナデてかるい稜をつくる。内底部および体部内外はナデ。僅かに砂粒を含む。焼成は堅緻で暗灰色を呈す。第3地点出土。

同形式のものは全部で4点あり，第3地点以外では第2・第4・第9地点でも出土した。そのうち軟質のものが1点。第9地点のそれは外底部を切り離したあとでナデ，外体部は少なくとも下位にヘラケズリを施していることが知られる。

8は高台が内側に入り，外に開いて付く。体部は上端でやや外に反り，十分ナデて仕上げられている。高台はヘラで調整する。焼成は良好で灰色。第1地点から出土した。

この形式のものは他に1点，第2地点でも知られる。但し軟質である。

9は体部が稜をもたずに内向しつつ大きく開き，高台も外に拡がる坏。外底部は切り離し

のあとナデ，接合部から体部内外面，内底部も指でナデる。砂粒が多く，暗灰色を呈すが焼成は堅緻である。第5地点出土1点のみ。

10はやや外に開く高台が付き，体部は接合部を指でナデた際のかるい稜をもって内向気味に立上る。外底部はヘラケズリのあとナデ仕上げ。焼成は土師器に近く淡赤黄色を呈して軟質，砂粒を含む。またこれには外底部に焼成前のヘラ描き文字があり，偏に問題は残るが「持」と読ませるのではないかと思われる（ＰＬ10－Ⅲ）。第2地点から出土した。

同形式のものはもう1点が第3地点で知られる。但し焼成は良い。

11は内側に入った短かい高台が付き，体部が急に立上る。外底部はヘラケズリのあとナデ。焼成は良好で明灰色。第2地点から出土した。

他にもう1点が第1地点からも出土しているが，この方は軟質である。

12は内側がくぼんだ短かい高台を付け，体部がゆるやかに立上る。外底部はヘラで切り離したまま，他はナデて仕上げる。自然釉がかかって暗灰色を呈し，焼成は堅緻である。第5地点から1点のみ出土。

13は甕。口縁部が外反して口唇部に突帯をまわす。胴部外面は格子の叩目文様，内面に清海波文様を残す。砂粒を含むが，焼成は良い。また口縁部外面に「×」印のヘラ記号がみられる。第1地点出土。他にも第5地点で2点出土した。

14はそれよりはるかに粗雑である。第1地点1点のみ。

甕の破片はその他，突帯のやや薄いものが第9地点で1点，また**13**と器形は同じであるが口縁部外面に縦方行のカキ目と横方向の沈線を1条入れたものが1点，第1地点で出土している。

15は高坏。接合部のみについてはナデ仕上げ。灰色で焼成は堅緻である。第3地点から1点のみ出土した。

16の小型の高坏。ゆるやかに開く脚部には指で押さえたかるい稜が計8面，途中横に沈線を1条廻らす。軟質で灰白色を呈す。第5地点から1点のみ出土した。

以上のとおり，器形の知られる須恵器は一応，今回の調査地区全域から出土している。時期は坏類についてみれば，大宰府関係出土品との比較から，**1**・**2**・**4**・**5**・**9**が7世紀後半，**13**が8世紀代，そして**3**・**6**・**7**・**8**・**11**・**12**は8世紀後半から9世紀初め頃に推定される。

点数が少なすぎることを承知のうえでこれを地点ごとに対比させてみると，同一尾根上に並ぶ第1～第5地点では7世紀後半から9世紀初め頃まで一応継続してみられるが，主体は8世紀後半から9世紀初め頃のものにある。これに対し，礎石建物の位置する第9地点では**7**の1点を混じえるとはいえ，主体は7世紀後半のものにおいている。第1～第5地点は付近に礎石建物の存在ないしは存在していたことが予想されたが，損乱が著るしいので，その年代巾の意味を云々することは難しい。しかし第9地点の礎石建物については，出土した須恵器から，その築造年代が基肄城創建時にまで遡るか，あるいは少なくともそれよりあまり下らない時期に当てられる可能性は強くなったといえる。この点は瓦からもいえることであ

る。ただ存続年代が9世紀まで下るかどうかという点で，まだ問題の予地はあろう。

第11地点も，付近に礎石建物が存在するならば，やはり基肄城創建時に遡る可能性はある。

なお，墨書およびヘラ描き文字については「寸」と「持」の2点は意味がわからない。「山寺」はその帰属場所を示すと思われるが，近隣地域で現名称にこの名称は見当らない。文献解釈の混乱からなかば伝説的なものとされているいわゆる城山（基山）四王院を当てるにしても，推定した土器形式の年代からはやはり無理があろう。8世紀までに造営された近辺の寺院となれば，肥前では国分寺・塔・塚廃寺・大願寺廃寺・寺浦廃寺など挙げられるが立地からみて可能性に乏しい。それより大宰府方面で，宝亀5年（774）に新羅祈伏の目的から造られたという大野山四王寺が，9世紀初め頃大野山寺の別称で呼ばれていたこと，また同じ頃宝満山山麓に竈門山寺が存在したことが文献から知られるので，むしろこの方により魅力を感じる。

3. 瓦

今回の調査では軒先瓦（軒丸瓦2点，軒平瓦1点）道具瓦（熨斗瓦10点，隅切瓦5点，面戸瓦1点）丸瓦，平瓦を出土したが，本報告では以前に表採されていたものもあわせて記す。今回の調査に瓦が出土した主な地点は第9・第10の2地点であり，第9地点では礎石建物を検出している。

(1) 軒先瓦 (Fig.6)

軒丸瓦

1は単弁八葉軒丸瓦。これは以前表採されていたものである。外区外縁はすべてはがれ，どのような文様を飾るかはわからないが，他に出土しているものから推測して二重圏文ではないかと思われる。蓮弁は弁端が反転する単弁で，全体的には不ぞろいの感がある。間弁はT字状を呈し，スマートである。中房内には1－6の蓮子と配す。瓦当裏面はナデているが部分的にハケも使用している。また瓦当側面はヨコハケである。瓦当と丸瓦の接合部は最上部にある。現面径16.9cm，中房径 5.5cm。胎土は砂粒を少し含み，色調はねずみ色，焼成は良好である。

2は1と同様な単弁八葉軒丸瓦で，今回第9地点から出土している。これには二重圏文を飾る外区外縁が残っていた。だいたいの点は1と同じであるが，蓮弁等の細部においてやや異なる。蓮弁は1よりもやや丸く大きい。中房は一部分しかないためよくわからないが，蓮子は1－6になるのではないかと思われる。裏面及び側面の調整はナデ，瓦当と丸瓦との接合部は瓦当裏面の浅い掘り込み状の溝から最上部と思われる。瓦当面径は不明，中房は復原径約 6.0cm。胎土は砂粒を比較的含む。色調は瓦当表面が黒ずんだ青灰色で，裏面は表面よりやや明かるい。焼成は良好である。

1・2と同様の文様のものは肥前塔，塚廃寺・大願寺廃寺・久池井遺跡・豊前法鏡寺跡他で出土している。

3は複弁八葉軒丸瓦で，以前に城内から出土したと伝えられている。外区外縁は傾斜してそこに外向陽起鋸歯文を飾り，外区内縁には珠文を配す。蓮弁は一応複弁ではあるが，弁が小さくなり，それぞれ分離して単弁化し，その間に線を入れている。しかし，これは各弁間の界線より弱いもので明らかに区別できる。中房はあまり境がはっきりせず，その中に大粒の蓮子を19個配す。またこの瓦には瓦当面の$\frac{2}{3}$の所を縦断する大きなキズがあり，これによって同笵瓦が推測でき，例として，伝大願寺廃寺出土のものが挙げられる。調整は瓦当側面および裏面の下縁部はヘラケズリ，裏面はナデ。瓦当と丸瓦との接合部はかなり高く，さし込み用の溝をほっている。瓦当面径18.8cm，中房径 5.9cm。胎土は砂粒を比較的含み，色調は白褐色で，焼成は普通である。

4は単弁二十葉軒丸瓦。この瓦は基肄城に供給した瓦窯跡と考えられる丸林の高崖瓦窯跡で出土したといわれる。今回同じ文様の周縁部小破片が1点，第10地点でも出土した。外区外縁は傾斜し，そこに線鋸歯文を飾り，外区内縁は珠文を23個配す。外区内縁の珠文と蓮弁の間には1本圏線がめぐり，その中の蓮弁は丸味のある逆三角形で，20葉ある。そして中房のまわりにも1本圏線がめぐり，中房はややもりあがってその上に1－7の小さな蓮子を配している。調整は瓦当側面はヘラケズリのあとナデており，裏面はナデてある。瓦当と丸瓦との接合部は比較的高く，溝を掘っている。またその溝は細い棒状のものでキズを入れ，接合しやすいようにしている。瓦当面径17.2cm，中房径 4.8cm。胎土は砂粒をほとんど含まず色調は灰白色で，焼成は良好である。

軒　平　瓦

5・6はどちらも三重孤文軒平瓦である。5は以前城内から表採されたものであり，6は今回第9地点から出土したものである。どちらも同様の施文具を用いており，5は上下に，6は上に施文具痕を残す。5は凹面は布目の上をナデてすり消し，凸面は斜格子目文の叩文様を顎部までも使用している。側面はヘラケズリである。6は布目をハケと指でナデて消し凸面は正格子目文を顎部におしている。側面はヘラケズリである。5は瓦当幅 3.8cm，上弦弧30.2cm，下弦弧28.2cm，弧深 5.5cm，顎幅10.2cm。胎土は砂粒を少し含み，色調は白褐色焼成は良好である。叩文は先に斜格子目文をあげたがもう一種併用している可能性がある。6は瓦当幅 3.9cm，顎幅10.7cm。胎土は砂粒をほとんど含まず，色調は薄褐色，焼成は良好である。

このような整った形の三重弧文軒平瓦は九州では他に肥前大願寺廃寺，筑後千代久廃寺でみられる。

(2) 道　具　瓦

熨　斗　瓦　(Fig.7)

計10枚出土している。これらは製作技法上では，大きく分けて2種になる。(**A**) 側面調整を1回または2回のヘラけずりで行なうもの。(**B**) 側面調整でどちらか一方が3回以上のヘラケズリ，または割ったときのままのものである。

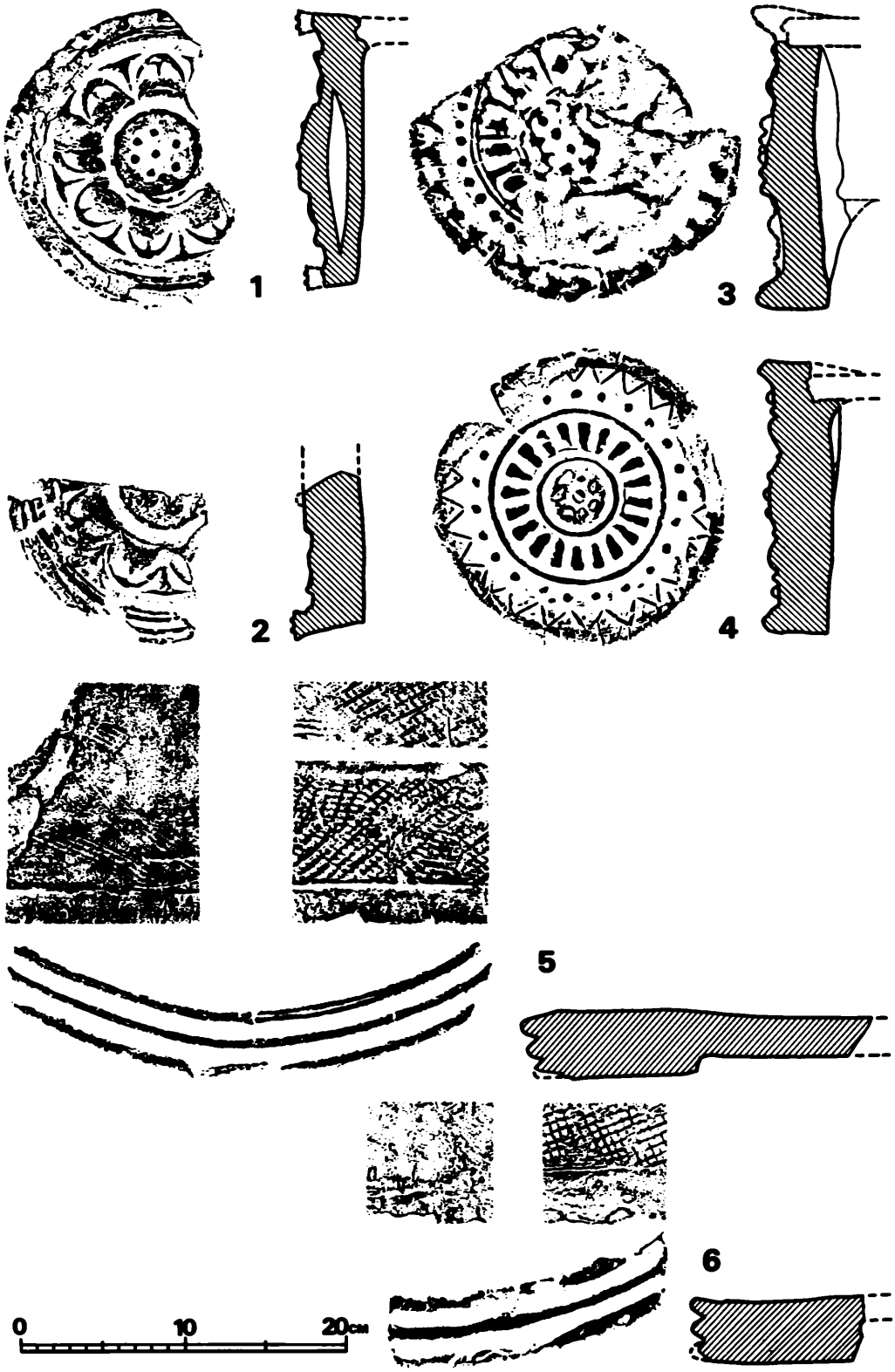


Fig . 6　軒先瓦実測図・拓影

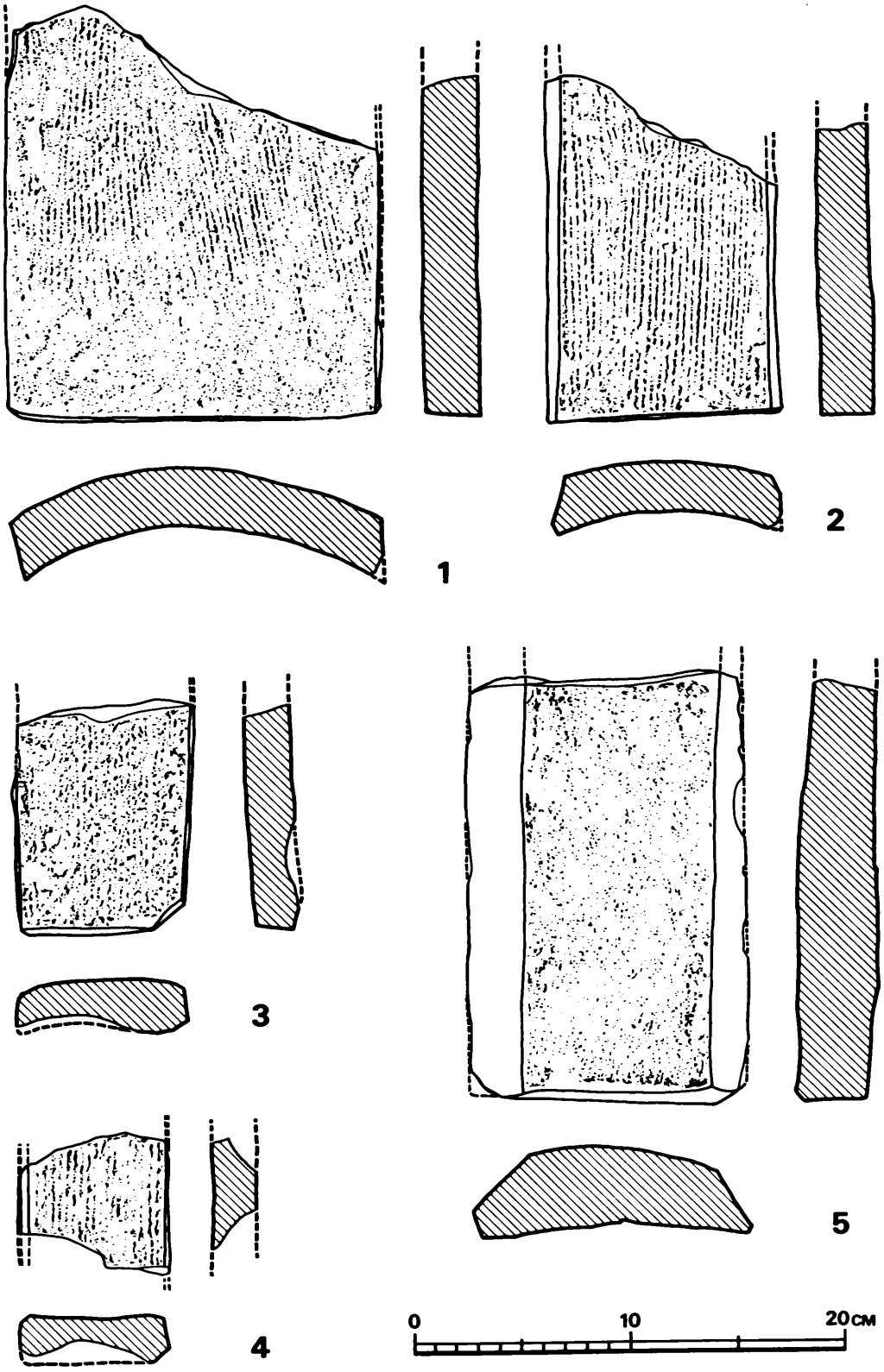
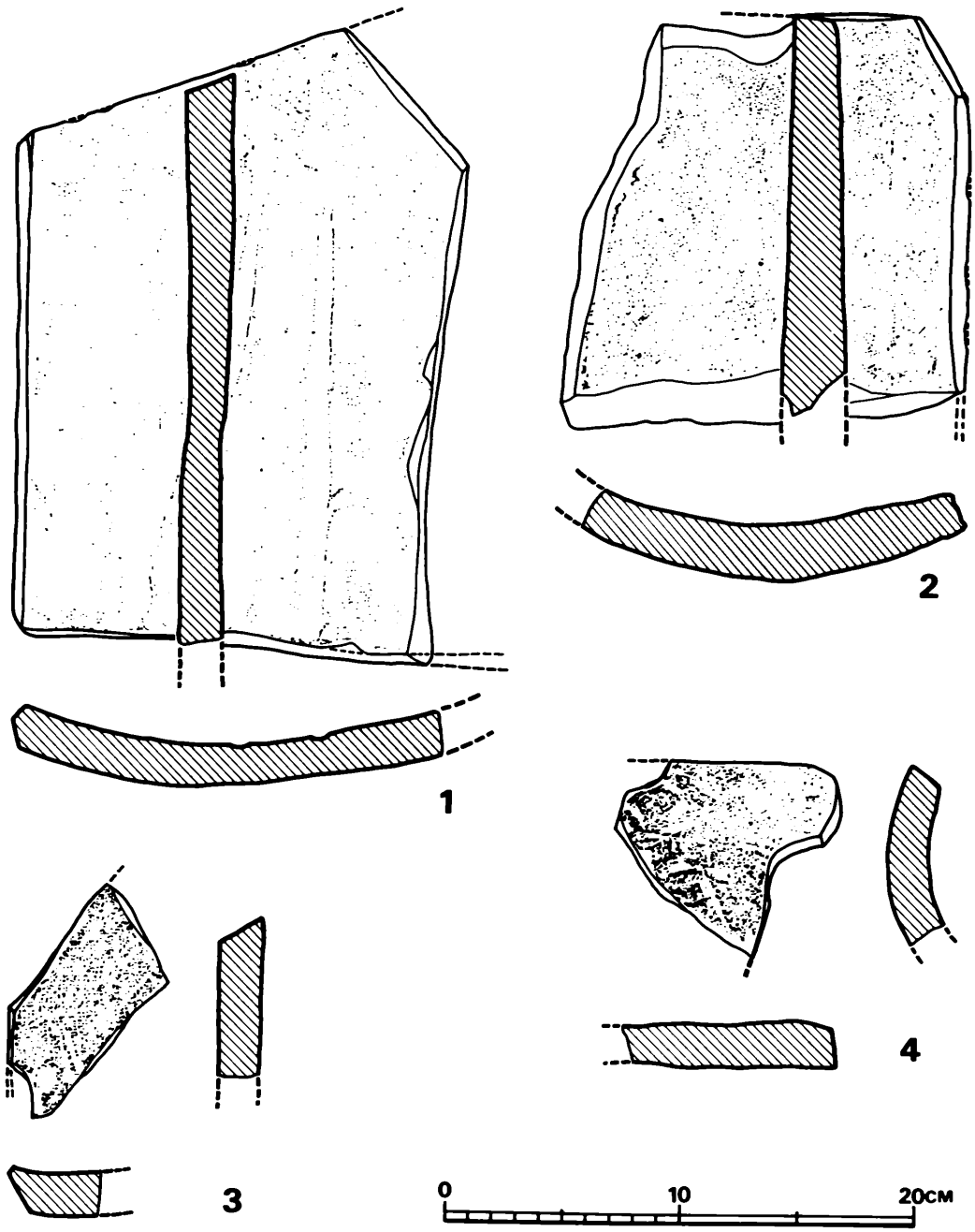


Fig . 7　道具瓦（熨斗瓦）実測図・拓影



Fig．8　道具瓦（隅切瓦・面戸瓦）実測図・拓影

（A）は7枚。すべて叩文様は縄目文で，黄褐色を呈している。胎土は砂粒をわりと含む。幅は10～18cmにおさまる。側面調整は1回のヘラケズリのものが6枚で，他の1枚が2回ヘラケズリを行なっている（Fig.7－2）。凹面は布目を軽くスリケシたものとスリケシていないものの両方ある。

（**B**）は3枚。叩文様はすべて縄目文で，幅はすべて10cm以下である。うち2枚は色調が黒灰色を呈し，側面の調整は，1つは両側それぞれ1回と3回（＋1）のヘラケズリ，もう一つはそれぞれ割ったままと3回のヘラケズリである（Ｆｉｇ.7－3）。他1枚は色調が黄褐色を呈し，胎土に砂粒をほとんど含まない。側面調整は2回のヘラケズリと割ったままとである。凹面はヘラケズリをしているようである（Ｆｉｇ.7－4）。

今，（**A**）・（**B**）の2種に分けてその特徴をのべたが，その中でもわかるように更に細分はできるかもしれない。しかし，点数が少ないので現段階ではこの2種にわけておく。ただ出土地点をみると（**A**）が全て第9地点，（**B**）は全て第10地点であり，この分類と対応するように分かれて興味深い。

Ｆｉｇ.7－5は以前表採されたものである。叩文様は縄目文を使用し，両側面は凸面に対してかなり広い角度でヘラケズリを行ない，そのあと面取りをしている。凹面はヘラケズリによって布目は完全に見えない。幅12.8cm，厚さ 3.7cm。胎土は砂粒をわりと含み，焼成はやわらかく，色調は凸面灰白色，凹面淡褐色を呈す。またこれは，先にのべた出土品の分類には入らないようである。

隅　切　瓦　（Ｆｉｇ.8－1・2・3）

全部で5点出土しており，1・3のように大きく切ったものが3点，2のように隅をほんの少しだけ切ったものが2点ある。

1は斜格子目叩文平瓦（Ｆｉｇ.10－4）を使用したもので，その角度は約 110度。2は正格子目叩文平瓦（Ｆｉｇ.10－1に類似）を使用したもので，その角度は約 150度。3は縄目叩文平瓦（Ｆｉｇ.10－8）を使用したもので，角度は約 140度である。

面　戸　瓦　（Ｆｉｇ.8－4）

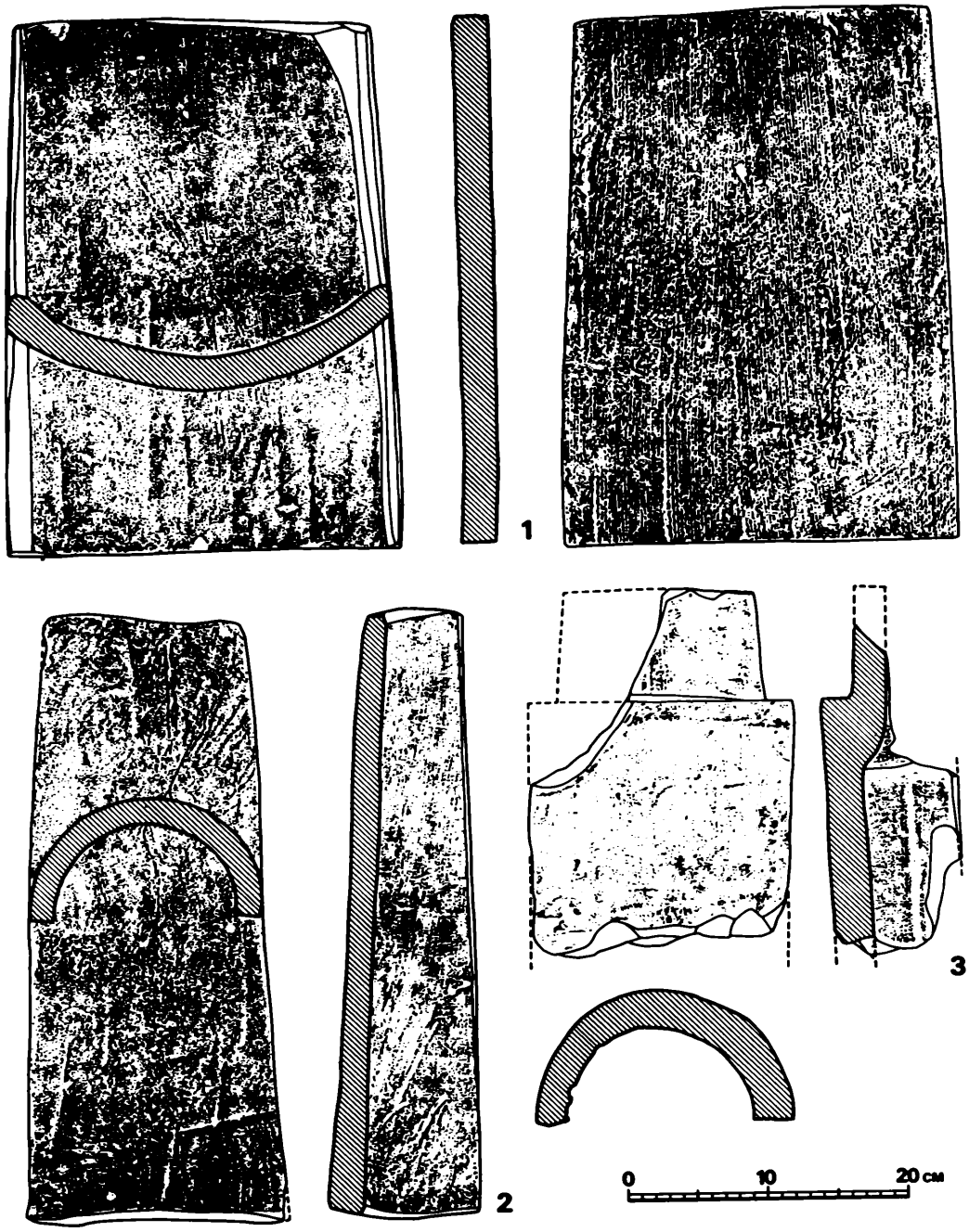
4の1点のみ出土した。これは丸瓦を利用したもので，側面を数度のヘラケズリによって丁寧に整えている。凸面はナデによってスリケシてあり，使用した叩文様はわからない。凹面は縁の部分はヘラケズリしており，かなり丁寧な作りの面戸瓦といえよう。

(3)　平瓦・丸瓦　（Ｆｉｇ.9）

平瓦は今回の調査では完形品がなく，その大きさがわからないため，以前表採された資料をもってのべる。この瓦は細い縄目文を凸面をもち，その大きさは長さ38.3cm，狭端部幅25.0cm，広端部幅28.0cm，狭端部弧深 4.2cm，広端部弧深 4.5cm，厚さ 2.5cmをはかる。調整は凹凸両面はそのまま，側面はヘラケズリ，凹面両端部も面取り状にケズっている。また叩板は最大幅が 6.5cm，最長が約30cmまでわかる。

この瓦以外で長さがわかるものが1点あり，39.6cmあった。

また出土瓦の調整は側面ではそのヘラケズリの状況から大まかに分類すると1回ケズリ，2回ケズリ（1回ケズリ＋面取り）3回ケズリ（1回ケズリ＋2回面取り）の3種に分けられるが，2回ケズリが一般的である。前後端部の調整はヘラケズリをしただけのものと，それを行なったのちに凹面にそって面取りしたものの2種がある。また凹面はスリケシたもの



Fig．9　平瓦・丸瓦実測図・拓影

とスリケサないそのままのもの両方がある。

叩文様には縄目文・格子目文・平行線文がみられる。丸瓦は玉縁付丸瓦・行基葺丸瓦の両者出土している。玉縁付丸瓦は厚手・薄手の二種があり，厚手のもの（Ｆｉｇ.9－３）は一般的に焼成があまく，黒ずんだ色をしており，砂粒をかなり含む。調整では，側面はすべて

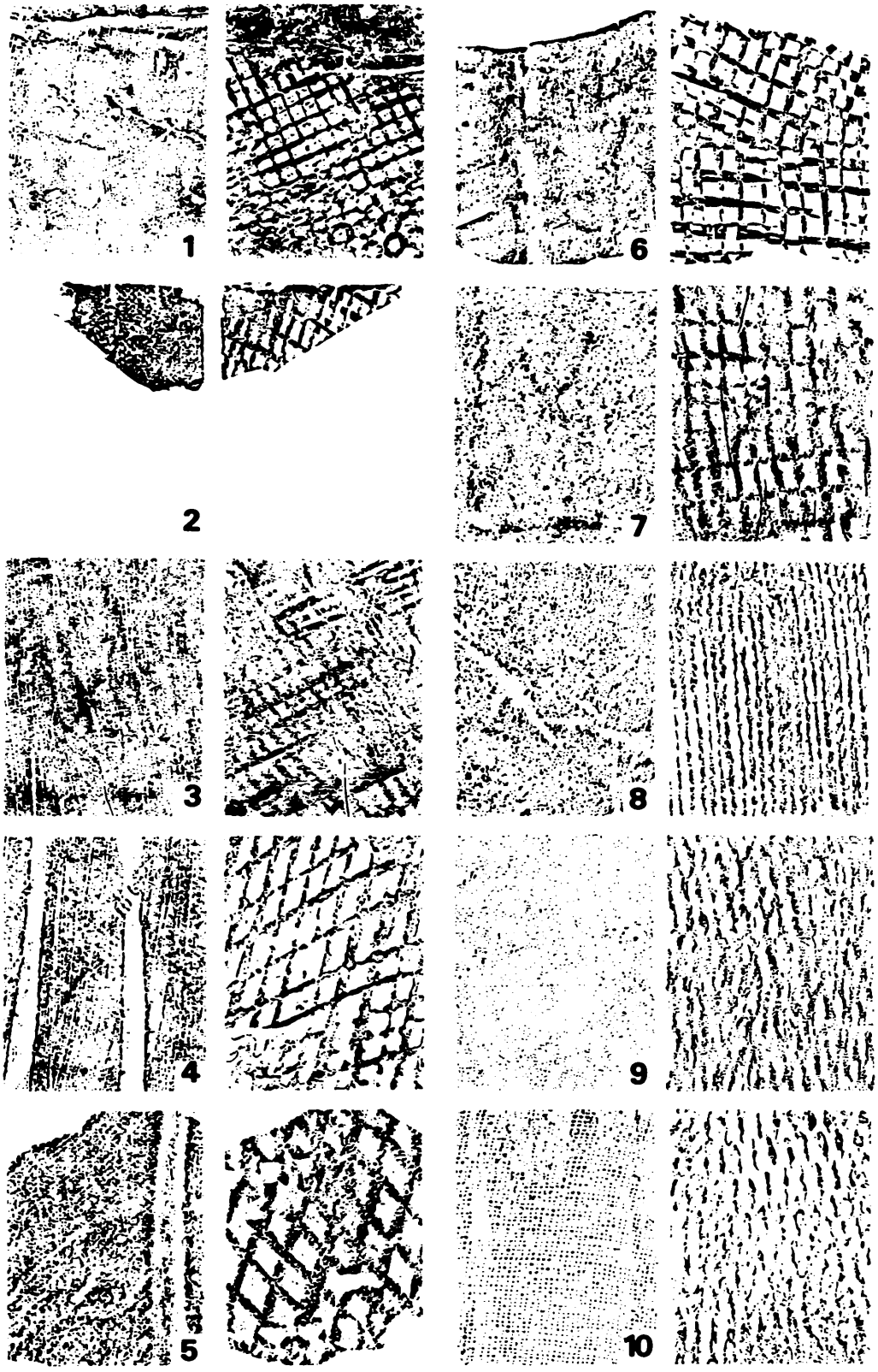
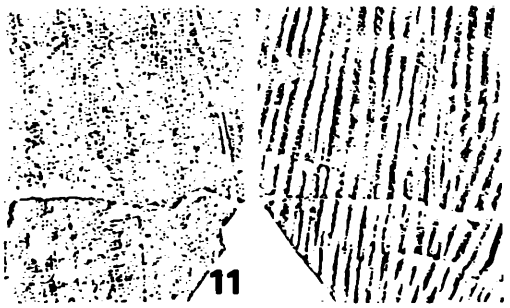
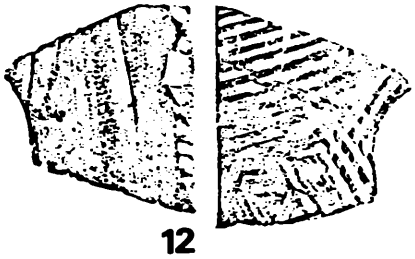


Fig. 10 叩文様拓影（½）





半切したままであり，玉縁部も同じである。薄手のものは数は少ないが，焼成は厚手のものより良く，側面は半切後，ヘラでケズリ，面取りも行なっている。また，玉縁部の先端も面取りを行なっている。凸面はたいていすり消しているのでよくわからないが，部分的に消し残ったものでみると縄目文の叩文様を使用している。

行基葺丸瓦の出土品は破片ばかりなので，表採の完形品をもってそれを見ることにする。ここに挙げたＦｉｇ.９－２の場合，凸面はヘラケズリによって叩文様を全面消し，凹面は布目を指によって部分的にナデ消している。側面は一度ヘラケズリしたあと両側を面取り，両端面も一度ヘラケズリしたあと凹面を面取りしている。またこの瓦は粘土ひもを巻き上げて作っている。長さ42.9cm，広端部幅18.7cm，広端部高10.8cm，狭端部幅13.4cm，狭端部高 6.7cm。

(4) 叩　文　様　（Ｆｉｇ.10）

叩文様は大別すると格子目文・縄目文・平行線文の３種になるが，細別すると格子目文７種，縄目文３種，平行線文２種の計12種になる。但しこの場合，類似してはっきり分けることができないものは同種として扱ったので，峻別すれば種類はさらに増えよう。量的には縄目文のものが最も多く，次いで格子目文，そして平行線文となる。その量全体でコンテナ約20箱分のうち平行線文が５点，格子目文が30～40点で，他はすべて縄目文である。

格子目文は正格子・斜格子・長方形格子があり，そのうち斜格子目文の４が量的には最も多かった。また，１・３は重弧文軒平瓦に使用されたものである。縄目文は細かく分けることはむずかしいが，一応３種に分けた。そのうち一番細かい８が最も多かった。平行線は一応２種に分けたが，だいたい薄手で，焼成が良好である。特に11は須恵器に使う叩文と同様な叩文を使用している。厚さ 1.5cm。

以上，今回の調査で出土した軒先瓦・道具瓦・丸瓦・平瓦の他に，表採資料も併せて述べた。まとめを兼ねて幾つかの問題点を挙げておくことにする。

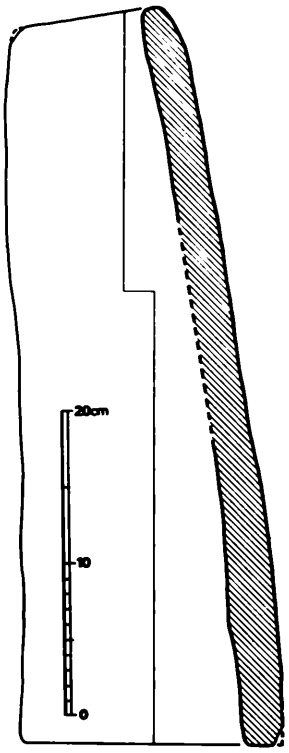
軒丸瓦は単弁八葉軒丸瓦・複弁八葉軒丸瓦・単弁二十葉軒丸瓦の３種が出土しているが，単弁八葉軒丸瓦は細部の違いで２種にわかれた。複弁八葉軒丸瓦は瓦当面に大きなキズがあり，これと同笵と考えられるものが佐賀郡大願寺廃寺から出土したと伝えられている。もしそれが確実であるとすれば，基肄城跡と大願寺廃寺の関係が考えられ，単弁八葉軒丸瓦，重弧文軒平瓦の関係も併わせ問題にされよう。

「軒平瓦は重弧文軒平瓦のみであり，２点あげたが，文様は同じと考えられる。ただ叩文様や調整の仕方は異なる。そして，Ｆｉｇ.６－６は凹面にハケを使用しているが，単弁八葉軒丸瓦のＦｉｇ.６－１も同様のハケを使用しており，製作時の関係に興味がもたれる。

軒先瓦のセット関係では他遺跡での出土状況などから考えて単弁八葉軒丸瓦と重弧文軒平瓦が組むと考えられる。しかし，軒丸瓦の他の２種については現時点ではわからない。

熨斗瓦は調整技法等の違いから大きく２種に分類したが，この２種の瓦がそれぞれ出土地点を異にして対応する。建物によって使用した瓦が異なったのか，それとも時期差なのか，今後吟味する必要があろう。

隅切瓦は５点だけであるが，いづれもヘラによって截然と切っている。わずか５点ではあるが，隅切瓦の存在によって，この瓦を使用した建物の屋根の構造に一つの問題が投げかけられよう。



Fig．11　土管状土製品実測図

面戸瓦は１点のみであるが，ヘラで丁寧に調整してあるものである。平瓦は桶巻造りのものは確認できるが，１枚造りのものは何ともいえない。また，素材は粘土板，粘土ひも巻きあげ両者あるようである。側面調整に関してはそのヘラケズリの状況で３種に分類したが，２回ケズリが一般的であった。丸瓦は玉縁付丸瓦，行基葺丸瓦の両者があり，玉縁付丸瓦はその調整等の特徴から２種にわけることができる。行基葺丸瓦は表採品であるが粘土ひも巻き上げのものがあった。玉縁付丸瓦・行基葺丸瓦は量的には前者が明らかに多かった。

4．そ　の　他

土器類，瓦以外には鉄鏃と石斧が出土している。

鉄鏃は第１・第２地点出土で，点数も少なく性格は不明である。

石斧は１点のみ第２地点から出土した。全長11.0cm。安山岩製で片刃とみられるが，一応刃部は両面を研いでいる。縄文時代のものと考えられる。

また，これは以前に第10地点付近から出土しているものであるが，形や他の類例からみて土管に使用されたと思われる土製品がある。（Ｆｉｇ.11）形は行基葺丸瓦の半切前の形に似るが，出土している行基葺丸瓦に比べてやや厚く，内面は広端部から中ほどまでナデて布目を消しており，最初から瓦ではなく，他の用途のために製作したと考えられる。しかし，この作り方は行基葺丸瓦の作り方とかわらないようである。内面狭端部付近は布目が残り，外面はタテ方向にナデている。両端部はヘラケズリをし，また雑ではあるが面取りもしている。胎土は砂粒を多く含み，色調は暗灰色，焼成は良好である。長さ49.3cm，狭端部径 9.7cm，

広端部径17.3cm。

5．〈付〉須恵質瓦からみた九州の初期瓦製作

今回の調査においてＦｉｇ．10－11の如く，平行線の叩文様をもつ瓦が出土している。この種の瓦は胎土に砂粒をあまり含まない良好な粘土を用い，堅緻に焼きあげられている。ここではこのような須恵器にみられる平行線文や細格子目文，同心円文などの文様の叩文を用い胎土は良好で焼成堅緻な薄手の瓦を，主に製作技法の観点から，仮に須恵質瓦とよぶことにする。[1]このような須恵質瓦は九州では他に筑前大浦２号窯跡[2]・柏田遺跡[3]・門田遺跡[4]・豊前垂水廃寺[5]・山田１・２号窯跡[5]・伊藤田窯跡[6]・法鏡寺跡[7]などで出土している。[8]

これらの遺跡およびその瓦をみてみると，まず大浦２号窯跡は野添・大浦須恵器窯跡群中の１基で，長さ5.60（＋α）ｍの無段登り窯である。須恵器と瓦を一緒に焼いており，瓦陶兼業窯と思われる。瓦は平瓦・丸瓦・熨斗瓦があり，軒先瓦は１点も発見されなかった。瓦はすべて平行線文の叩文を使用し，凹凸両面を不規則にヘラケズリしたものがある。また，平瓦は凹面に同心円文を押したものがある。厚さは 0.9～ 3.0cmのものもあるが， 1.5cm前後が最も多く，全体に薄手の瓦である。この瓦の時期は共伴した須恵器から６世紀末～７世紀前半と考えられる。

柏田遺跡は旧石器時代から歴史時代にわたる複合遺跡であるが，瓦は歴史時代遺構中の溝の中から多く出土している。種類は軒丸瓦・平瓦・丸瓦で，軒丸瓦は同遺跡の近くの上白水遺跡出土の単弁八葉軒丸瓦と同じである。平瓦・丸瓦は格子目文・平行線文の叩文を用い，その中に焼成が堅緻で須恵質のものや，凹面に同心円文をもつものがある。これらの瓦の時期は同じ溝内で出土した多量の須恵器から７世紀中頃～後半と考えられる。

門田遺跡は先の柏田遺跡の東方 100ｍの所に位置し，旧石器時代から中世にわたる複合遺跡である。瓦は歴史時代の包含層中から出土しており，平瓦・丸瓦がある。凸面の叩文は格子目文と平行線文があり，焼成の軟質のもの，硬質で須恵質のものの両方がある。この時期は共伴する須恵器から７世紀後半と考えられる。

垂水廃寺は法隆式伽藍配置が推定され，百済系単弁八葉軒丸瓦・新羅系複弁八葉軒丸瓦・重弧文軒平瓦・雁行唐草文軒平瓦などを出土する寺院跡である。平瓦・丸瓦の叩文はその種類がとても多く，格子目文・平行線文・縄目文・放射状文・草葉文など計84種を数えるが，その中で細格子目文・平行線文など[9]の叩文をもつ平瓦・丸瓦に厚さが薄く，焼成が堅緻な須恵質瓦がみられる。この垂水廃寺の存続年代は出土瓦・須恵器等から７世紀後半～８世紀後半と考えられる。

山田１・２号窯跡は垂水廃寺の供給瓦窯跡であるが，どちらも無段登り窯であり，須恵器と瓦を一緒に出土し，瓦陶兼業窯の可能性がある。また２号窯のすぐ隣りに須恵器窯の３号窯があり，その他にも未調査ではあるが須恵器窯跡が付近に存在する。瓦は行基葺丸瓦と平瓦が出土し，軒先瓦・ユ縁付丸瓦は検出されなかった。叩文様は全て格子目文で，その中に須恵器の甕の叩文に似た細格子目文をもつものがあり，焼成は堅緻である。これらの瓦は共

伴した須恵器から上限は7世紀後半におかれる。

伊藤田窯跡は須恵器窯跡群の中にあり，全長14.8mの無段登り窯で，多量の平瓦と須恵器の甕・壺などを出土した。瓦は桶巻造りで，凸面に同心円文を押している。中にはこの叩文をヘラなどで消しているものがある。厚さは薄めで，焼成は堅緻である。この時期は共伴している須恵器から7世紀前半～後半と考えられる。

法鏡寺跡は法隆寺式伽藍配置が推定され，百済系単弁八葉軒丸瓦・法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦などを出土している。平瓦・丸瓦の叩文様は格子目文・縄目文があるが，その格子目文[10]をもつ平瓦の凹面に細かい同心円文をもつものが1点発見されている。この寺跡は出土瓦から7世紀後半がその創建時期と考えられる。

基肄城跡の須恵質瓦は既にのべたように礎石建物を検出した第6地点で出土している。平行線文の叩文で，胎土には砂粒を含まず，焼成は堅緻で，厚さ 1.5cmである。その時期は共伴している瓦・須恵器などから上限が7世紀後半と考えられる。

以上のべてきたことをまとめてみると，大浦2号窯跡・山田1・2号窯跡・伊藤田窯跡はいずれも須恵器と瓦を一緒に焼いた瓦陶兼業窯と考えられ，全て無段登り窯である。大浦2号窯跡では伴出する須恵器大甕の外面の叩文と同じ平行線文を瓦を凸面に，更に凹面に同心円文を使用している。このことからこの瓦の製作に須恵器製作工人が関与していたことは明らかであろう。山田1・2号窯跡では叩文様などでははっきり推定することはできないが，垂水廃寺との関係を考えると，垂水廃寺は瓦供給窯跡が3カ所発見されており，その中の桑野原瓦窯跡[5]は遺物の発見のみで実体がわからないので除けば，山田窯跡の他に友枝瓦窯跡[5]がある。友枝瓦窯跡は地下式有階有段登り窯で，垂水廃寺出土の軒先瓦・丸瓦・平瓦を焼いている。そこでこの2窯跡をあわせて考えると，友枝瓦窯跡は瓦専門の有階有段登り窯で，軒先瓦を焼いているのに対し，山田窯跡は無段登り窯で，丸瓦・平瓦のみを焼いている。更に山田窯跡は瓦陶兼業窯で，須恵器窯跡群中にあるといえる。以上のことから山田窯跡で焼成した瓦にも須恵器製作工人が関与していた可能性は考えられよう。次に伊藤田窯跡では無段登り窯で須恵器と瓦を一緒に焼き，瓦の凸面全面に同心円文を押し，明らかに須恵器製作工人が瓦製作に関与していたと考えられる。

また，先にのべた法鏡寺跡の創建時の供給瓦窯である豊前野森窯跡[11]は，先に定義した意味での須恵質瓦は出土していないが，百済系単弁八葉軒丸瓦・平瓦・丸瓦・須恵器などを出土する瓦陶兼業窯であり，その時期は須恵器および，軒丸瓦から7世紀後半と考えられている。よって，ここでも瓦製作に須恵器製作工人が関与していたのではないかということは可能性として考えられよう。

更に九州以外では大和飛鳥寺[12]，山城幡枝窯跡[13]などで同様の瓦を出土している。飛鳥寺の平瓦は凸面に平行線文をもち，凹面の両端部に同心円文をもっており，須恵器製作工人によって作られたと考えられている。幡枝窯跡は有際有段登り窯で，飛鳥寺創建当時の瓦当文と同類の軒丸瓦・平瓦・丸瓦・須恵器を一緒に出土し，斜格子目叩文平瓦の凹面に同心円文があり，瓦製作に須恵器製作工人が関与していたことが考えられる。またこの窯跡の時期は7世

紀初頭に比定されている。

通観すると大浦2号窯跡が6世紀末～7世紀前半，柏田遺跡が7世紀中頃～後半，門田遺跡が7世紀後半，垂水廃寺が7世紀後半～8世紀後半，山田1・2号窯跡が7世紀後半以降，伊藤田窯跡が7世紀前半～後半，法鏡寺跡が7世紀後半以降，基肄城跡が7世紀後半以降となり，したがっておよそ6世紀末から7世紀後半が年代的な幅となる。

また，九州における瓦使用の寺院跡および官衛関係遺跡等は現状ではその上限がだいたい7世紀後半と考えられているので，これらの須恵質瓦は九州における初期の瓦製作のものと考えることができる。

よって，九州における初期の段階の瓦製作には瓦製作工人と共に須恵器製作工人が関与していたということが考えられるのではないだろうか。そして，その後瓦生産が軌道にのってくると須恵器製作工人の関与もだんだんなくなっていったのではないかと思われる。[14]

〔註〕

(1) 中でも同心円文をもつものはそれのみで大きな特徴となりうると考えられる。また，これらのはっきりした叩文様をもたなくても同様な特徴をもつ須恵質の瓦はあるが，ここではそれらは一応含めないこととする。

(2) 小田富士雄・柳田康雄・真野和夫『野添・大浦窯跡群』1970.3

(3) 井上裕弘 他『柏田遺跡の調査』（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第4集』1973）

(4) 井上裕弘 他『門田遺跡の調査』（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第3集』1973）

(5) 森田勉・高橋章・亀田修一 他『垂水廃寺』1976.3

(6) 賀川光夫『伊藤田瓦窯跡』（『中津市史』1965）

(7) 小田富士雄 他『法鏡寺跡・虚空蔵寺跡』1973.3

(8) これら以外にも遺跡の実体の明らかでないものとして，福岡県春日市春田平田窯跡，同原古墳群，同県筑紫郡那珂川町片縄などがある。

(9) 報告書中の集成図のA－36・37・38・39，B－1・2などである。

(10) この格子文は須恵器に用いられるものではなく，普通瓦に使用されているものであるが，同心円文をもつことによって例としてあげることができる。

(11) 小田富士雄・小倉正五『野森窯跡の調査』（『鶴見古墳』1975.3）

(12) 『飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報，第5冊，1958

(13) 横山浩一・吉本堯俊『京都市幡枝の飛鳥時代瓦陶兼業窯跡』（『日本考古学協会昭和38年度大会研究発表要旨』1963）

(14) この須恵器製作工人の瓦製作への関与がなくなる時期はやはり太宰府などの中心地域が早く，地方においては須恵質瓦という形で表にはでなくても，地方寺院等の瓦生産状況から考えて，その関与が遅くまで続いた可能性は考えられるのではないだろうか。

追　記

福岡県八女市所在の菅の谷1号窯跡出土品中にも平瓦・丸瓦各1点づつ須恵質瓦の小破片がある。平瓦は凸面に平行線文の叩文があり，厚さ1cmと薄手，丸瓦は凸面をナデですりけし，胎土は砂粒を含まず堅緻な焼成である。窯跡の年代は共伴した須恵器から奈良時代後半と考えられる。（小田富士雄・真野和夫『菅の谷窯跡群』1971.3）

V　結　　語

天智4年（665）創建になる基肄城跡は，白村江の戦の後，百済の遺臣憶禮福留・四比福夫2名の指導によって築かれた最初の本格的な朝鮮式山城として，同時に築かれた大野城と並んでよく知られる。大野城跡については特に近年，数次にわたる発掘調査によって次第にその実態が明らかにされつつあり，とりわけ礎石建物の性格，年代等について多くの新たな資料が加えられる情勢にはなってきている。

しかし一方，基肄城跡の場合，これまで実施された調査はほんの数えるほどしかない。しかも内容の多くは，松尾禎作氏[1]，久保山善映氏[2]，鏡山猛氏[3]らの研究に依るものであり，その後に付け加えられた知見は殆ど皆無に近いというのが実状であった。

一体に，朝鮮式山城は対新羅防衛上の必要から，対馬・九州北部・瀬戸内を経て畿内に至るルートを結ぶ国家的規模の軍事施設として，いわば全体が一つの有機的な関連のもとに築かれた一大防衛組織である。従って個々の朝鮮式山城といえども，比較検討を通じ全体の中での位置づけがなされたとき，はじめてそれが歴史的資料としての価値を発することになる。日本書紀に記事がみえながらその所在が不明なもの，あるいは広義の朝鮮式山城に属しながら，逆にその記事がみえないものの性格。全体の築造年代のずれと存続期間，構造および機能の相違など，長いあいだ論じられて来ながら，今もって解明されるべく残された問題は非常に多い。一つには従来の調査が発掘を伴うものでなかったことにもよろうが，今後，個々に関する調査もそのような全体的展望に立脚してなされるべき性格のものであるといえよう。

その点で問題を九州だけに限ってみても，直接的には大宰府防備の一翼を担う基肄城跡について不明な部分があまりに多いということが，大宰府に関する研究において重大な障害の一つとなっていたことは否めない。

今回の調査は林道建設に係る確認調査ということの性格からして，上記の目的を本来的なものとする調査ではなかった。制約されたところもあまりに大きい。ただ，これが実質的に殆ど最初といってよい発掘調査にあたるという点では，少なくとも今後の調査を進めるうえで，それなりの意味はあったと考える。

調査結果に基づき，ここで改めて今後の問題点も含め，主な成果を要約しておくことにする。

まず遺構において，一応の全面調査をした第9地点礎石建物については，従来知られていた同城あるいは大野城跡にみる最も一般的な5間3間の礎石建物で，基本的には同じ構造，性格を有するものと考えられる。ただ，その占地の在り方には大野城跡と違い，狭い尾根ないしは傾斜面途中の僅かな平旦部を造成し，地形を最大限利用しようとする基肄城跡特有のものが認められた。また礎石に使用された石材の一部には，立地状況に適応するものであろうが，他に例をみないほどの巨石が使用されており，いかにもその背景に国家権力の存在を思わせ，築城の壮大さを象徴するものがあった。

なお屋根の構造は本文に述べたとおり，隅切瓦の出土から，この種の建物について一般的

にいわれてきた切妻以外の可能性も考えられるに至ったが，これは今後の資料増加をまって決すべき問題であろう。

構築年代については出土した須恵器および瓦の形式から推して，基肄城創建当初ないしはそれよりさほど下らない時期に当てられる。このことは本遺構が他群から離れて単独に，しかも既知の礎石建物の中で最も低い標高に在ることを考えると，創建時すでに現在みる各群の配置がかなりの程度形をなしていたことを想定させるものである。

その他の遺構については，今回踏査した結果だけでも，第12地点および第11地点の西方約100mのあたりに，従来はっきりしなかった礎石建物の群在を確認している。ほかに，確認はし得ないが附近に礎石建物の存在が予想される地点も多いことからみても，結局城内全域で礎石建物数が40棟をこすことは必至であろう。

次に出土遺物のうちまず土器類については，今回の調査に関する限りで7世紀後半から9世紀初め頃にかかる資料の出土をみた。一応，創建当初から一定巾の年代を示すわけであるが，全体的にみて8世紀前半頃に一つの空白があるように思われた。これは発掘地点の選び方に依るのか，それとも何らかの意味があるのか，今のところわからない。

年代巾に関連していうと，存続期間の下限については基肄城だけでなく，とかく論議の多いところである。文献に現われる基肄城は，大城山（大野山）との混乱があって問題の多い三代実録貞観8年（866）条の「城山」に関する記事を別とすれば，神亀5年（728）のこととして，万葉集に大伴旅人が読んだ歌の詞書にみえるのを最後に，その後関連しては類聚国史弘仁4年（813）条に現われる基肄団の存在を知るばかりである。今後の調査によって特に土器類の検討からこの点は明らかにされる必要があろう。

また3点ではあるが墨書「山寺」，「寸」，ヘラ描き「持」も今後の類例に関心がもたれる。中でも「山寺」については，もしそれが大野山寺あるいは竈門山寺の略であれば，本須恵器が大宰府方面から搬入された可能性も生じてくることになり，基肄城と大宰府方面との関係および人的交流を暗示するものとして興味深いものがある。

瓦では以前からいわれてきた単弁八葉軒丸瓦と三重弧文軒平瓦の共伴が，第9地点礎石建物跡ではじめて確認された。第11地点では別に単弁二十葉軒丸瓦の小片も1点出土している。基肄城跡の軒丸瓦はこれまで3種類知られているが，そのうち今回採録した複弁八葉軒丸瓦は伝大願寺廃寺出土品と同笵関係にある。工人の移動が，あるいは瓦そのものの移動か，その背景を念頭におきながら今後追求すべき問題である。また軒平瓦では，上記三重弧文軒平瓦のほかに，かって丸林に遺存していたこうらざき窯跡から，扁行唐草文で上縁連珠文，下縁および左右縁に鋸歯文を配する老司式軒先瓦が出土したと伝えられる。しかし現在写真が残るのみで実態は詳らかでない。いずれにせよ，これまで知られる資料はすべて奈良時代を下るものではないが，年代にかなりの巾があるので，礎石建物の配置・修復・廃絶等の問題を扱ううえで，その出土が注意される。

平瓦・丸瓦についてはその製作技法の細かな相違がどこまで地点ごとの相違としてとらえられるか，今後なお検討してゆきたい。いわゆる須恵質瓦の性格も別項に扱ったとおり，工

人の系統および組織を探るにあたって重要な意味を含んでいると考えられる。

また隅切瓦の出土も，礎石建物の構造に関するこれまでの一般的解釈に一つの疑問を提した。

現在の基肄城跡は戦後の植樹が厚く全山を覆い，礎石群，土塁等の所在も定かでないところが多い。それでも全体としてみれば既して保存は良好である。土塁は総延長4km余，西峰の基山と東峰の坊住山の稜線に沿って二峰を廻り，一周して環状をなす。城内へ入る門跡は水門を含めてその途中4カ所に認められ，それぞれ石塁あるいは礎石をよく残している。礎石建物もおそらく40棟をこして遺存するであろう。また最近では，基肄城に関係すると思われる土塁一部の残存が，関屋土塁の西方にやや離れて確認され，現干塔山遺跡から基肄城に向かい，かつて小土塁の存在したことが推察されるに至ってきた。

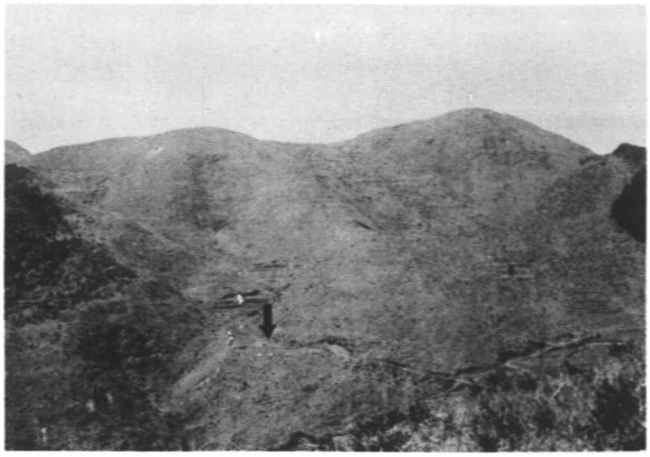
これら遺構は現在放置された状態に近い。確かにそれはそれで，これまでの保存に一役かっていたという側面はある。しかし，いわばなしくずし的に進行されやすいこの種の遺跡における諸開発に対し，全く無防備であるということはもはや許されるべき段階ではない。その点で今日，これをいかなる形で永久的に保存してゆくか，さらには歴史資料としていかに活用してゆくかということが，新たな問題として提起される時期にきているといえよう。

〔註〕

(1) 松尾禎作『基山の研究』1932.8

(2) 久保山善映「基山と基肄城阯」(『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告第六輯』)1938.7

(3) 鏡山猛『大宰府都城の研究』1968.6



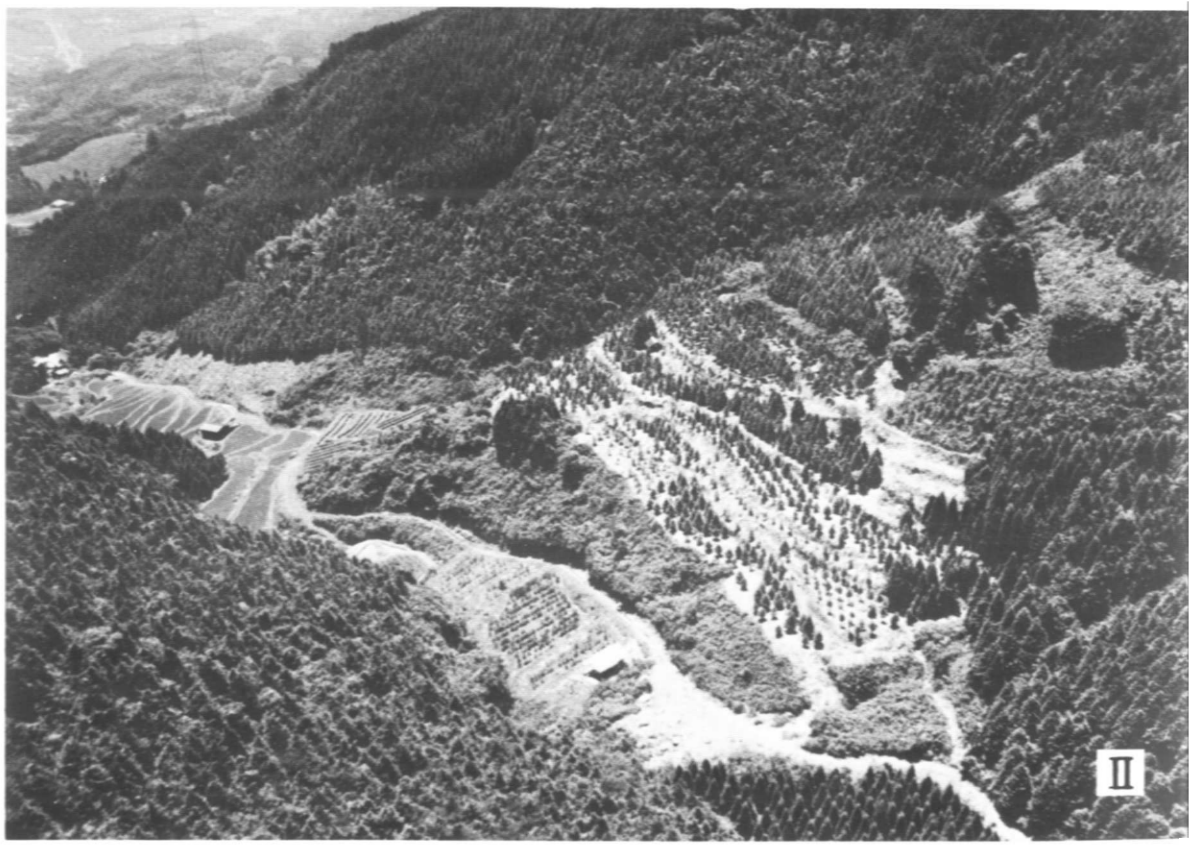
PL. 12

昭和初め頃の基肄城跡
（矢印は第9地点礎石建物）
『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告第六輯』より

図　　版

I　基肄城跡航空写真（左上方は太宰府）　　II　基肄城跡遠望

PL. 1

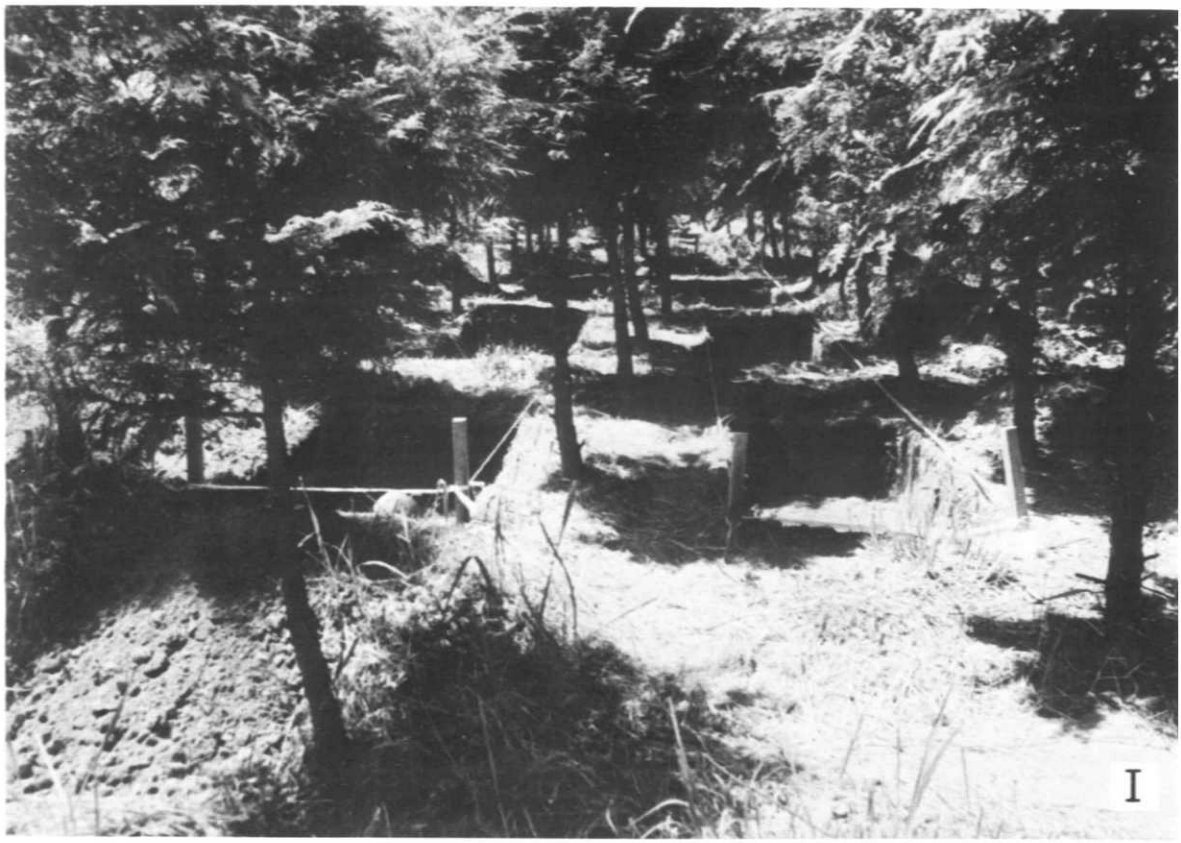


I　山頂土墨線　　II　第1～6地点（谷左隅は水門）

PL. 2

I　礎石建物（第９地点）　　II礎石建物の土止石列

PL. 3

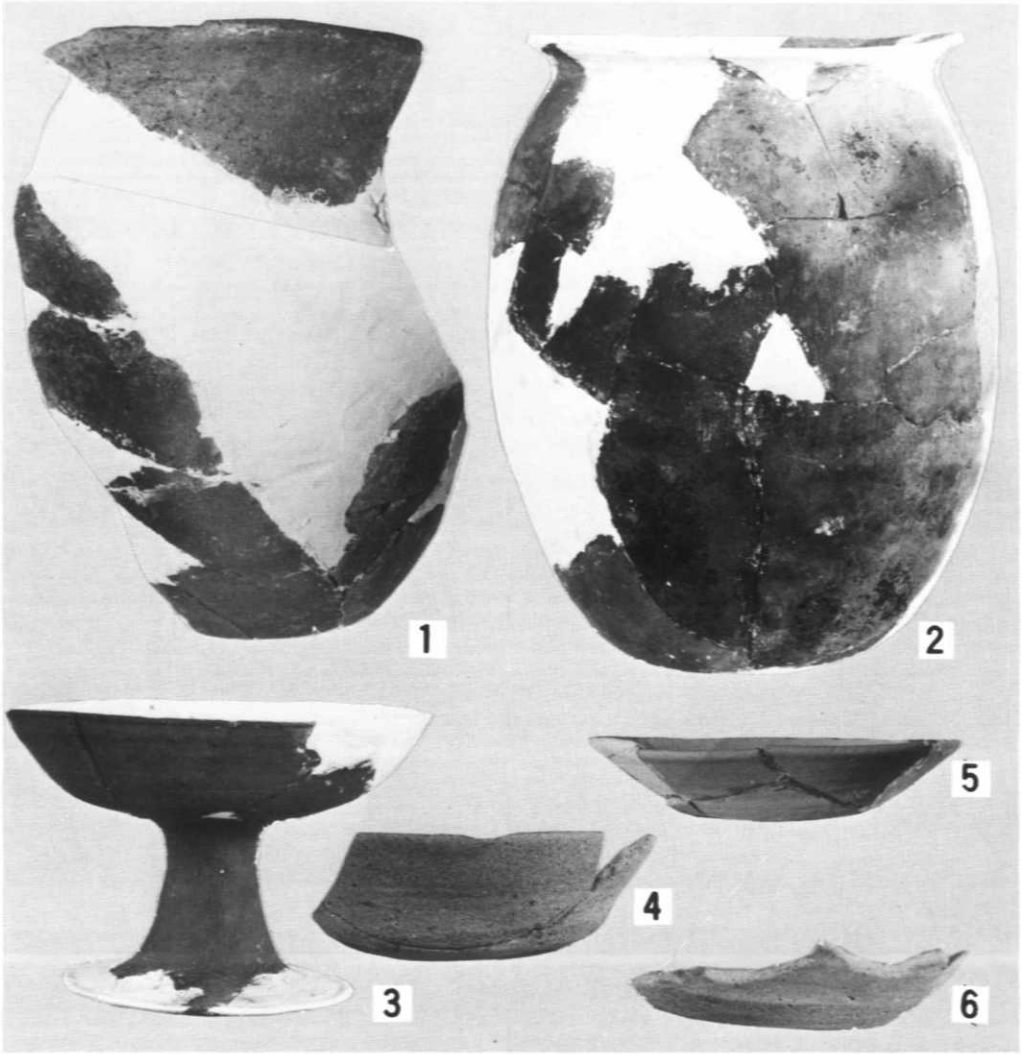


I　第３地点トレンチ　　II　第10地点トレンチ

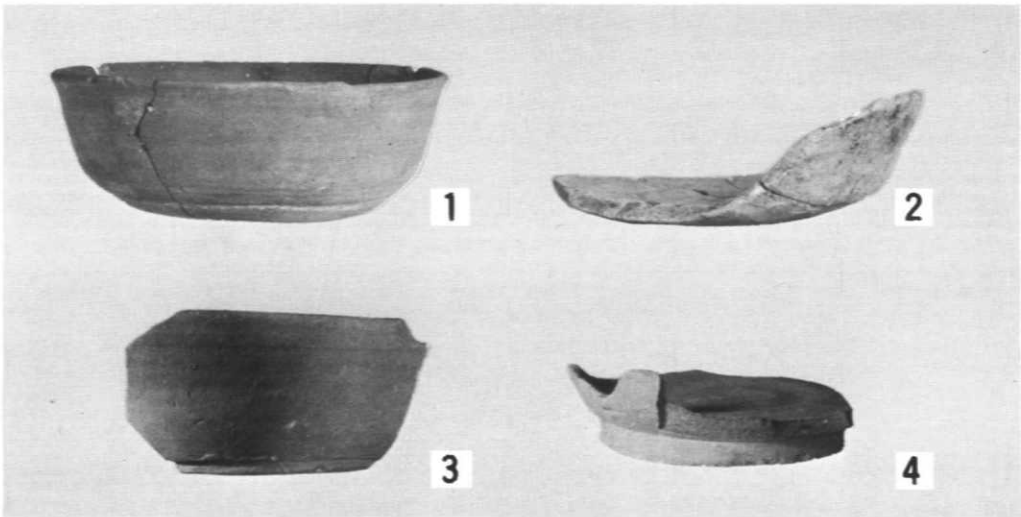
PL. 4

I　第12地点　　II　第11地点

PL. 5



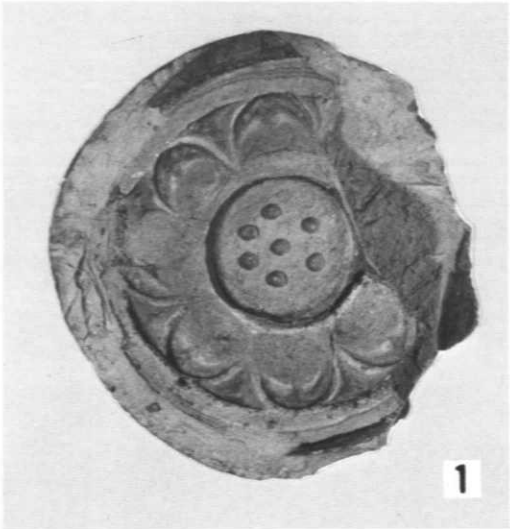
I

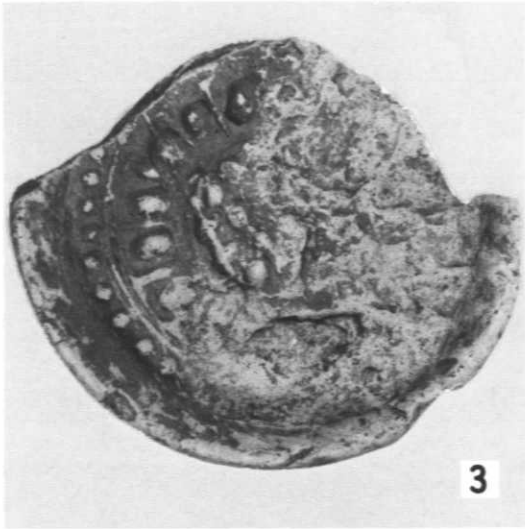


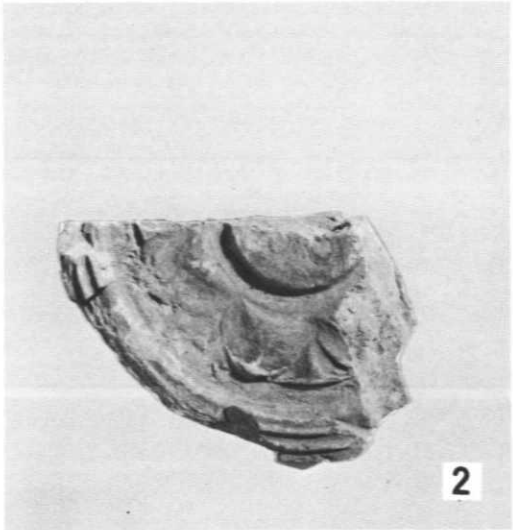
II

I　土師器（Fig.4－10・1・9・3・5・4に対応）1・2は$\frac{1}{4}$，他は$\frac{1}{3}$
II　須恵器（Fig.5－4・5・7に対応）4は第3地点 $\frac{1}{3}$

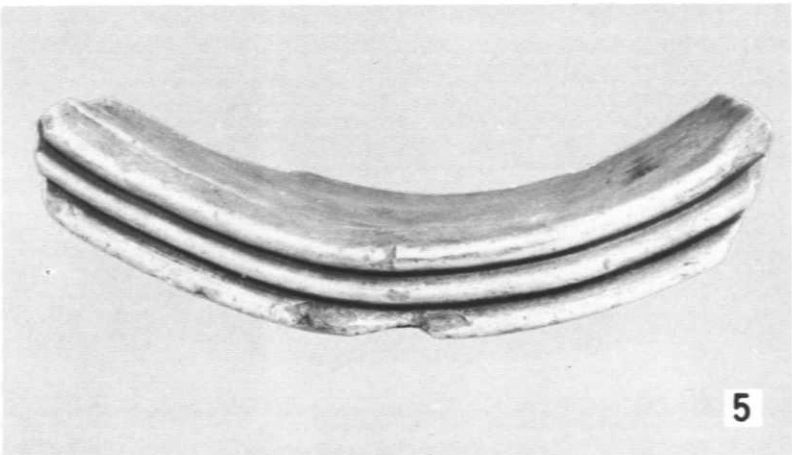
PL. 6





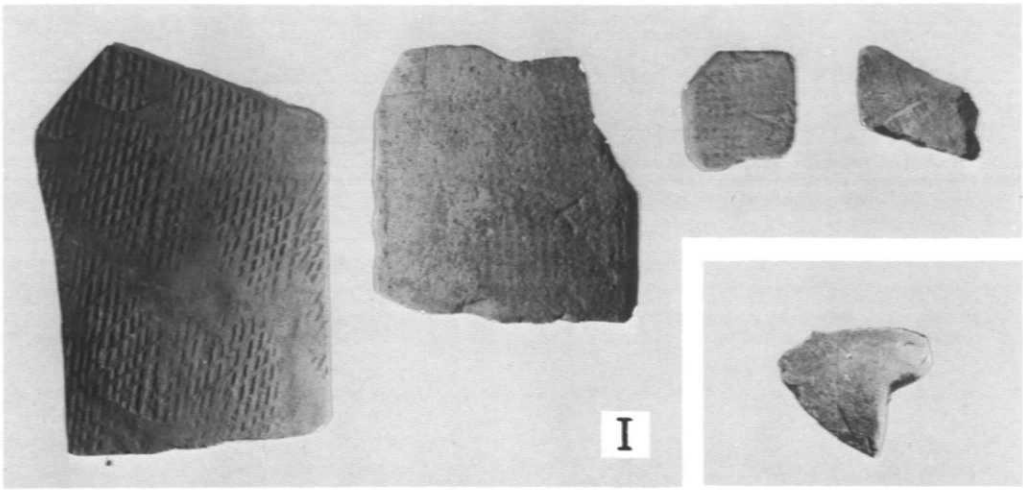


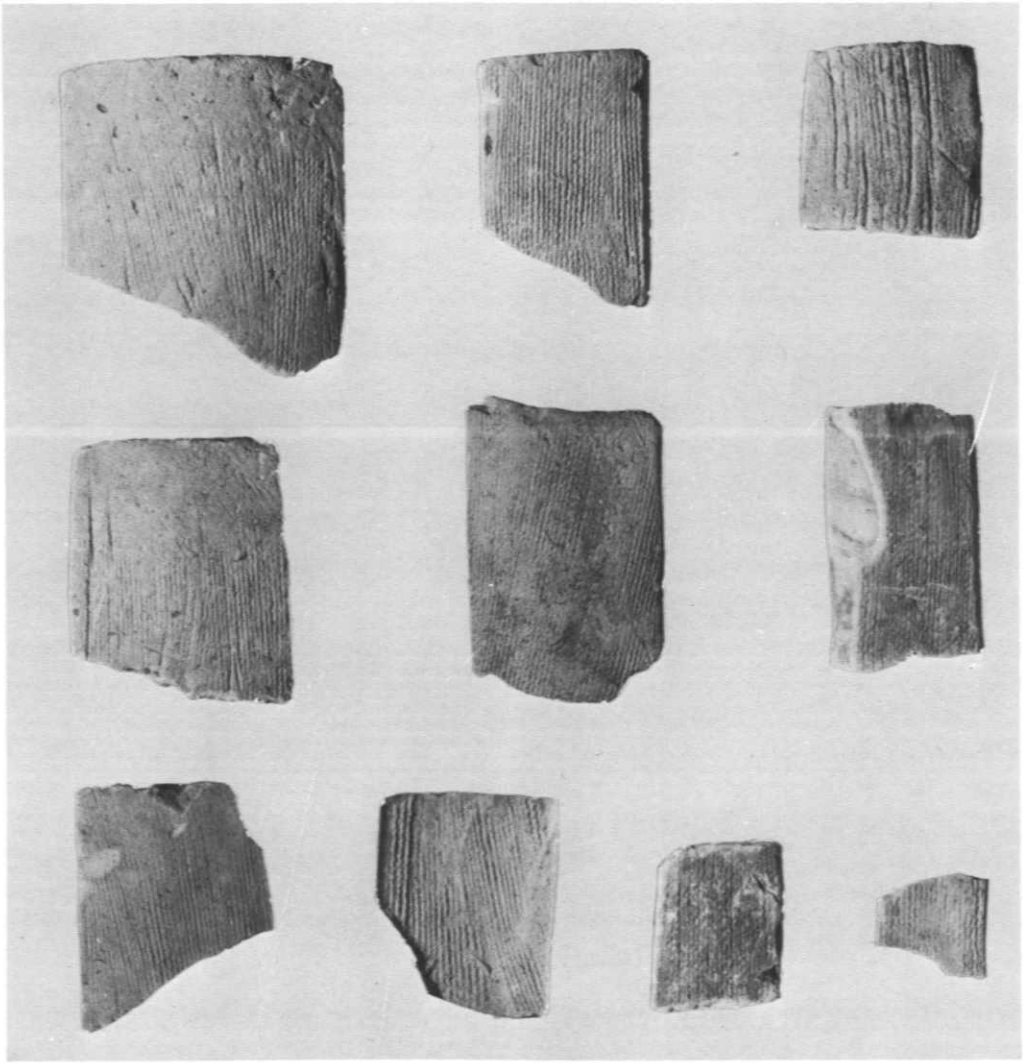
1 Fig. 6－1
2 －2
3 －3
4 －4
5 －5



軒　先　瓦　(1/3)

PL. 7

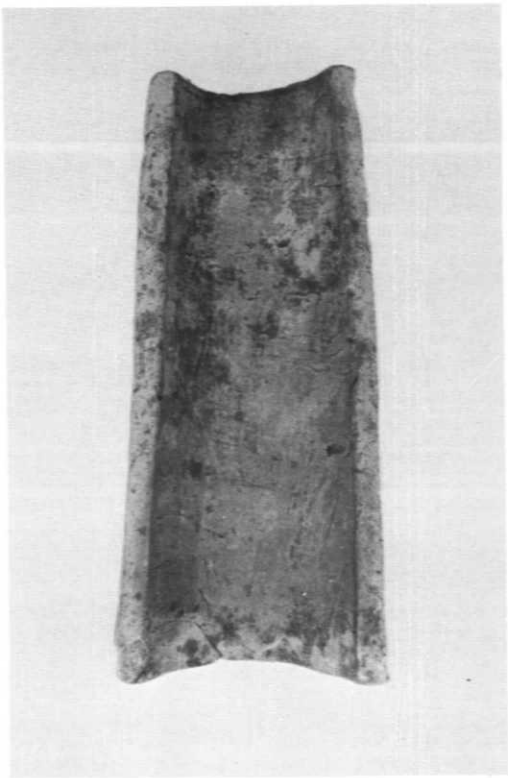


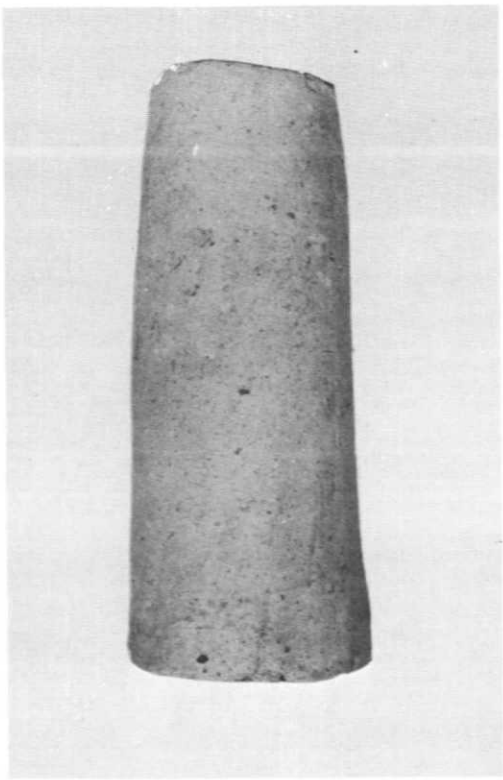


I　隅切瓦　　II　面戸瓦　　III　熨斗瓦（$\frac{1}{3}$）

PL. 8

I

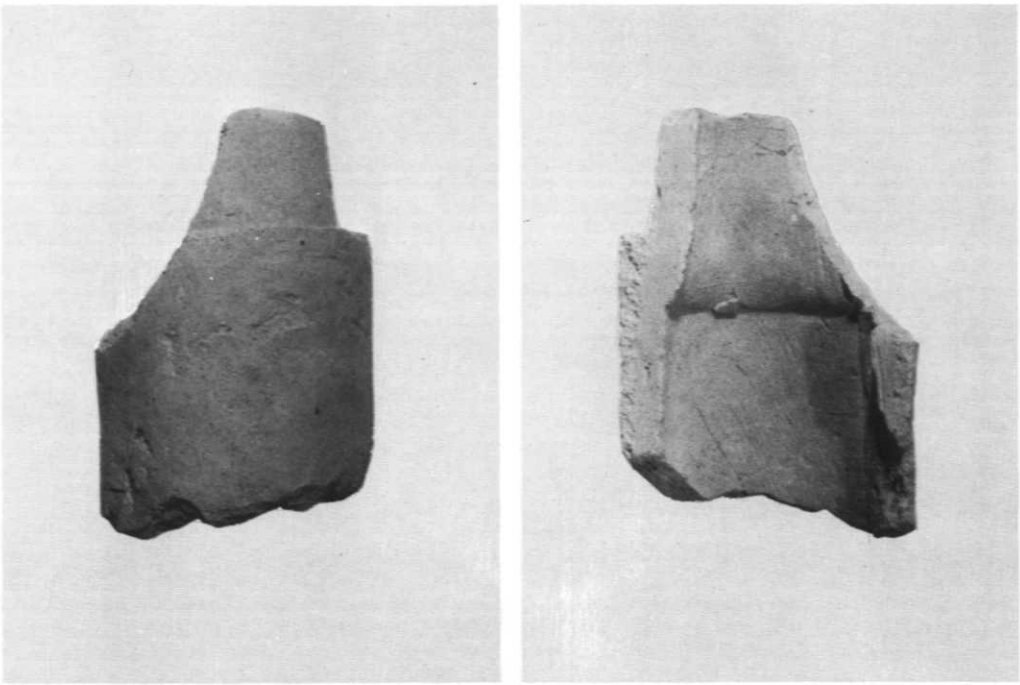




II

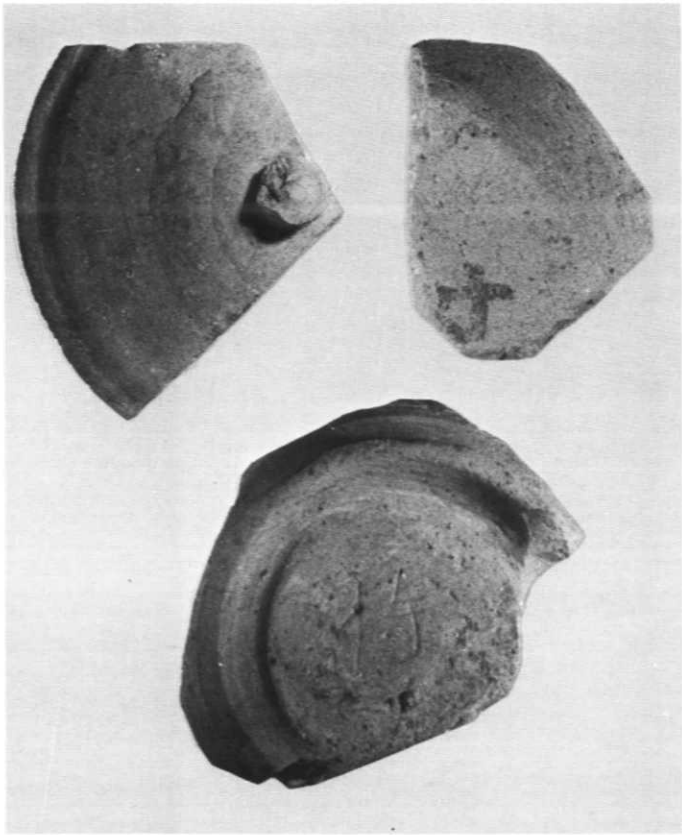
I 平 瓦　II 行基葺丸瓦（$\frac{1}{5}$）

PL. 9



I

II

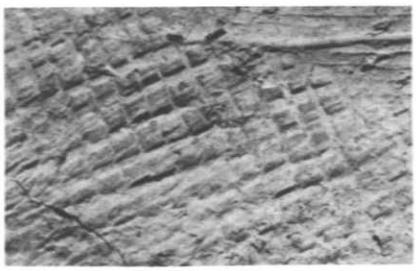


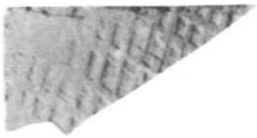
III

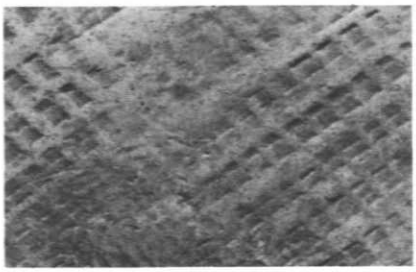
I　玉縁付丸瓦（$\frac{1}{5}$）

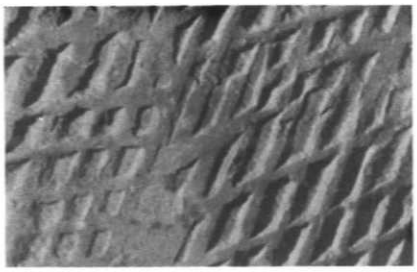
II　土管状土製品（$\frac{1}{5}$）　　III　墨書およびヘラ描き文字

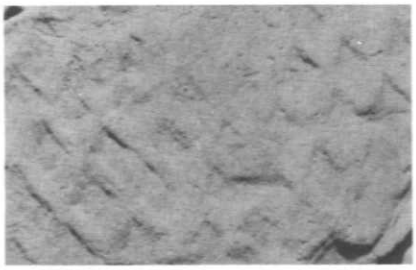
PL. 10

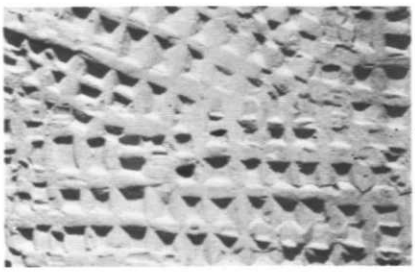

1


2

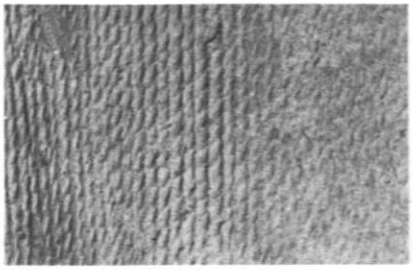

3

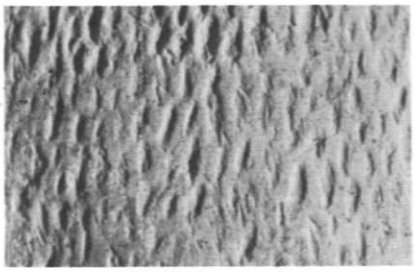

4

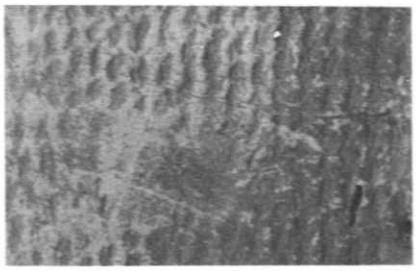

5

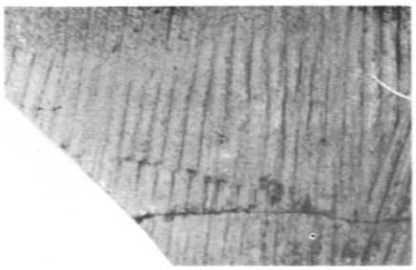

6

7


8


9


10


11

12

叩文様（番号はFig. 10に一致）$\frac{1}{2}$

PL. 11

特別史跡　基肄城跡

――林道建設に伴う確認発掘調査報告書――

昭和５２年３月３１日

発行　基山町教育委員会
三養基郡基山町

印刷　弘　文　社
佐賀市天神二丁目